

TALES of RE: ABYSS
テイルズ オブ リ アビ
ス

酎はい人形

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

テイルズシリーズのファンだったとある成人男性

中에서도思い入れのあるシリーズ8作目の「ジァビス」

メインストーリーは勿論の事、サブイベントまで完全攻略をしているガチ勢
一時期、ハマり過ぎて部屋に引こもる程だった

今では成人を過ぎ、ゲーム自体をやらなくなってしまった

あの頃の感動も無くなり、ただ社会人として生きていた

目次

1	目が覚めたら聖なる焰の光に	1
なつてた	前編	1
2	目が覚めたら聖なる焰の光に	7
なつてた	後編	7
3	目が覚めたら超振動で吹っ飛ば	300
されてた		0
4	気がついたら泥棒呼ばわりされて	267
た		
5	気がついたらストーリー捻じ曲げ	
てた	前編	
6	気がついたらストーリー捻じ曲げ	
てた	後編	
		159
7	いつの間にか赤く染まっていた	前
8	いつの間にか赤く染まっていた	202
9	いつの間にか守りたいと思っていた	後
		233

1 目が覚めたら聖なる焰の光になつてた 前編

「・・・ただいま」

何となく発した言葉

まあ一人暮らしな訳で返してくれる人いないんですけどね

仕事早々に片付いて帰宅したはいいけど、飯食って風呂入って寝るしか無いんだよ
なあ・・・

悲しすぎる独身男性です

風呂に入り飯を食べ、ふとテレビの横に置いてある本棚に目をやる

そういえば一人暮らしをする時に何個かゲームを持ってきたんだっけ

特にやりたい訳じゃないけど、何持ってきたんだっけ

何だかんだ20個以上持ってきたからな・・・

20歳過ぎたからは、一応最新のゲーム機を買ってたりはする

・・・全然やってないけど

まあそもそもゆつたりとゲームをする時間が無くなったのは事実

休みもだらつとしてるだけだしな・・・

孤独死しそう・・・俺・・・

しかし懐かしいなあ

なんとなく持つてきたゲームのパッケージ裏を見ながら思いを馳せる

こんなゲームもあつたなあ・・・

このゲームで友達と競つたなあ・・・

「・・・あ」

ジアビスが出てきた

すんごい久しぶりに見た気がするな

正直本当に好きだったシリーズだったなあ

20歳超えてからは全くやらなくなつちやつたなあ・・・

・・・

不意にゲーム機を準備する

いや、別段やりたかった訳では無いけども少しだけ触りたくなつた

メモリーカードを差し込み、起動した

何周目かは全然覚えてはないけど、多分ラスボス手前辺りなはず

・・・うーん

確か攻略本片手にクツソやつたからやる事無くなつちやつてるんだよな・・・

フィールドでモンスターと戦つてはみるが、流石にレベル200じゃ相手にもなら

ん・・・

・・・

・・・

「・・・楽しかったな・・・」

思い出が蘇る

このゲームには思い入れがありすぎる

本当に好きだった

・・・楽しかったんだ

ゲームを切り、電気を消して布団に入る・・・
そうだ・・・楽しかったんだ

本当に好きだった・・・

・・・今も——————

——————

——————

——————

——————

・・・ん？

あれ、目覚まし鳴ってないよな？

とうかかけ忘れた説まである

しかもこの感じ寝坊した説まであるな・・・

やつちまつた・・・

なんて会社に言い訳するか・・・ん？

とうか何この天井

俺の部屋にこんな豪華な電飾あつたか？

とうかベッドでかくないか？

・・・あー、これまだ夢見てるやつか

明晰夢とか初めて見たかも

まあ覚めないうちに堪能しないと

ベッドから起き上がる

窓の外を見る

・・・ん？

なんで見覚えがある景色なんだ？

いや・・・その前に・・・

窓の反射に映る自分を見る

見覚えあり過ぎる

いやいやいや

・・・え!?

・・・俺・・・

「ルークになってる
!!!?!!」

その日、聖なる焔の光に転生してしまった成人独身男性の物語が始まった

2 目が覚めたら聖なる焰の光になつてた 後編

あー、まだ夢見てんのかな？

とりあえず頬を引つ叩く

・・・明晰夢でも何でもないわ

何故こうなつた

昨日ちよつとだけジアビスやつたからこんなことになつてるんか？

いやそんな訳ないだろ！

そりゃ昔はすげえやつたけどさ・・・

まさか・・・こんな事になるとは・・・

窓から見える空を眺めながら考え込む

俺・・・どうすりやいいのよ・・・

今後の展開とかまあ微妙に覚えてるよ？

とりあえず一旦部屋から出るか

ルーク「……気のせいかな？」

今若干頭痛がした気がしたんだが……

いやあ、これアレでしょアレ

まじか……。これ本当にそのままストーリー展開されるやつか？

俺流石にルークのセリフ一字一句覚えてないぞ……

まあ頭痛は気の所為みたいだしな

とりあえず出るか

外に出ると見覚えのある景色が広がる

中庭は綺麗に整備されている

固定された視点しか見た事なかったけど、こう見るとほんと綺麗だな
ふと花壇の方を見る

あ、あの人が……

ペール「こんにちはルーク様。いい天気でございますな」

なんてこつた

話しかけられちまったヤバイヤバイ

ルークなんて言つたつけな・・・

ルーク「お、おうおはようペール。今日も花壇の手入れありがとな」

言つてて思った

絶対ルークのセリフと違うわ

だつてこのおじいちゃん驚いてるもん

とかこの人確かペールだったよな？

これで違つたら普通に失礼なやつや

ペール「と、とんでもない。これがワシの仕事でございますから」

ふうー、何とかセーフか？

ギリギリの所立ち回ってる感がヤバイ・・・

パール「わしの育てた花で、公爵様やルーク様をお慰めできるならこれ以上の幸せはありません」

なんて心の綺麗なおじいちゃんや・・・

こういう歳のとりかたをしたいよ

ルーク「そっか。まあこの花も良いけど外の花とかも見てみたいもんだ」

パール「お屋敷の中に軟禁状態ではなかなかそうも行きませんかからな」

・・・あ、やべ

ルークのロールプレイしないと・・・

いやもう今更か

普通に会話を楽しんじまったよ・・・

パール「しかしこれも陛下のご命令。御成人までの辛抱でございますよ」

中身もう27ですよペールさん・・・
言えないけども

ペール「見慣れたものかも知れませぬが、この花がルーク様のお心をお慰め出来れば
幸いです」

いかん、このままではボロが出そう・・・
会話をそうそうに切り上げないとヤバいわ

ルーク「気持ちはありがたいけど無理しない程度にな」
ペール「ルーク様・・・ありがとうございます」

右手を上げながら颯爽と去る

・・・まあルークロールプレイとしては0点だな
そもそも初期ルークの真似なんてできるわけが無い
コレいよいよヤバいな・・・

あんま変なこと言つて物語の結末変わんなきゃいいけど・・・

中庭を抜け、玄関に通じる廊下に入る

こう見るとでかいのなこの屋敷

俺からしてみたら羨ましい限りなんだよルーク君！

・・・でも実際軟禁されちまつたらそうもいかないんだろうな

メイド「ルーク様、おはようございます」

うっわびつくりした！

アカンアカンちよつと待ってよ

全然心の準備出来ていませんよ

ルーク「お、おはよう。今日もいい天気だな」

・
・
・

もう素の俺です・・・

ごめんねルーク

メイド「ええ本当に。雲ひとつ無い爽やかな朝ですね」

メイドさんニツコニコです

普段のルークって何て返してるのだろうか

そんな事を考えながら何となしに玄関の方に向かう

玄関もまた豪華絢爛

ここだけで余裕で住めるんですが・・・

ラムダス「おぼっちゃま」

右から急に声を掛けられる

誰がおぼっちゃま

あ、俺か

ルーク「お、おう！どうした？」

・・・どうも安定しないな・・・俺・・・

ラムダス「ただいま、ローレイ教団詠師ヴァン・グランツ詠将閣下がお見えです」

うえ!?

嘘やろヴァン!?

なんか聞き馴染みの名前が出たけど安心出来ねえ・・・
しかしヴァンが来たということはつまり？

ルーク「あれ、今日剣の稽古の日だったっけ？」

ラムダス「いえ、火急の御用とか」

ルーク「そっか」

出来ることなら顔をなるべく会わせないようにしたいんだが

ラムダス「後ほどおぼっちやまをお呼びするとの事でしたので、お部屋にてお待ち下さい」

どうやら回避不可能のようだな

おいおいまじかよ

これは絶対ボロが出ちやう

でもさっきのパールとの会話を考えると多少セリフが違っても問題ないのでは説がある

勝負に出るか・・・

それはそれとして・・・

ルーク「所で、そのおぼっちやまつて言うの勘弁してくれないか。すっごいむず痒いんだけど」

ラムダス「いえ、二十歳の御成人まではおぼっちやまと呼ばせて頂きます」

本当に勘弁して欲しいんだが・・・

呼ばれ慣れないというか普通に恥ずかしい

まあ無理強いは出来んし・・・最悪我慢するけどさ

ルーク「・・・へいへい、んじや部屋に戻ってるよ」

入ってきた扉に向かう

ラムダス「それからおぼっちゃま」

ヒエ・・・

背中痒い

ルーク「・・・どうした？」

ラムダス「くれぐれも庭師のペールにお言葉をかけるのはおやめ下さい」

ルーク「何だよ」

ラムダス「あれはおぼっちゃまとは身分が違います」

は？キレそうなんだが

ルーク「いいだろ別に世間話くらい」

ラムダス「本来ならお言葉を交わすことすら許されない身分なのです」

ルーク「理由になってないだろ。庭師だろうがなんだろうが、この屋敷にいる以上は大事にしてやりてえんだよ」

ラムダス「おぼっちゃま・・・失礼致しました」

ルーク「・・・もう行くぞ」

足早にその場を去る

実際問題どうなんだろうな

公爵子息っていう身分がそれを許さないのかもしれないよな

・・・ペールの迷惑になっても可哀想だしな

アイツの目が届かないところなら話そうかな

まあしかしここまで縛られてたら性格もねじ曲がるわ

部屋に戻りながら少しだけ考える

俺がルークになったからには、しっかりストーリー進行をしなければならぬ
必然的に俺はなんにも知らないフリをしなければならぬよな．．．

出来ることなら．．．誰も死なせたくなんだよな

でもそれをしたら、ストーリーが捻じ曲がる

すげえジレンマ．．．

部屋の扉を開けて一息つこうとした時だった

『ルーク．．．．．我がた．．．．．れよ．．．．．声に．．．』

頭痛だ

しかもかなり痛いやつ

次いでに幻聴も聞こえてくる

ルーク「．．．いつてえ．．．っ！やっぱりさつきなの．．．」

膝から崩れる

正直立ってられない

ガイ「どうした、ルーク！また例の頭痛か!？」

うお!?

この声もしや・・・

窓の方に目をやる

ルーク「ガイ・・・か・・・」

頭痛も痛いけど感動の方が強いんだが

いやマジかよマジかよ

生のガイじゃねえか

男ではあるがこの男は本当に推せる

ルーク「大丈夫・・・治まってきた」

あとサイン下さい

ガイ「また幻聴か？」

ルーク「ああ、全然聞き取れなかったけどな」

ガイ「このところ頻繁だな。確か、マルクト帝国に誘拐されて以来だから……………」
もう七年近いのか」

ルーク「せめて頭痛だけでもどうにかなんないもんなのかなあ」

「声だけならともかく頭痛は勘弁して欲しい

何回も来たら頭割れちゃう

ガイ「まあ、あんまり気にしすぎない方がいいさ」

何この唯一無二の親友感

推せますね

男だけど惚れちやいそうや

ガイ「それより今日はどうする？ 剣舞でもやるか？」

え!? 剣舞!?

そういえば俺剣なんて使った事ないんですが!?

この世界が剣と魔法の世界観だったこと忘れてたわ!

どうしよう・・・

今更剣術とかちよつとわかんないっすねく・・・とは言えないし

あ、そういえば・・・

ルーク「いや、ヴァン師匠が来てるっほくてき。後で呼びに来るらしいんだ」
ガイ「ヴァン様が？ 今日には剣術の日じゃないだろう？」
ルーク「火急の用事なんだってき」

ーコンコン

扉をノックされる

メイド「ルーク様。よろしいでしょうか」

ガイ「おつとまずい。ここにいるのは秘密なんだ」

慌てて窓の方に飛び乗るガイ

ガイ「見つかる前に失礼させてもらうよ。じゃあな」

ルーク「ああ、また後でな」

ガイが窓から飛び降りる

なんて身体能力なんだ

まさりや剣から斬撃飛ばせる時点で色々超人か

ーコンコン

もう一度ノックされる

メイド「ルーク様？」

ルーク「ごめんごめん、いいよ入って」

部屋の扉が開く

メイド「失礼致します。旦那様がお呼びです。応接室へお願い致します」
ルーク「了解、伝達ありがとうございます」

一礼して部屋を後にするメイド
なるべくボロが出ないようにルークを演じるしかないか・・・
どう考えてもバレる気しかない・・・

ルーク「・・・考えても埒が明かないな、行くか」

応接室へと向かう

コーンコーン

応接室の扉をノックする

フアブレ公爵「入りなさい」

ルーク「失礼します」

面接の時のような緊張感があるなおい

ここ自宅だよな？

まあ俺にとってはアウエーな環境なんですけどね

ルーク「ただいま参りました、父上」

フアブレ公爵「うむ。座りなさい、ルーク」

とりあえずヴァンの隣に座る

・・・あー、やだなあ

ルーク「・・・隣、失礼します」

軽く挨拶をしておく

一応仲がいい様に取り繕わないといけないのに・・・
なんかよそよそしくなっちゃうな

ヴァン「剣術の稽古は怠っていないか？」

急に話しかけてくるやん

少なくとも『俺』はやってないけど・・・多分ルークならやってたんだろうな

ルーク「まあ、ぼちぼちですよ。一人でやる稽古にも限界がありますから」

ヴァン「それなら、後で見えてやろう。だがその前に話がある」

やめてえ・・・

話ならいくらでも聞くから剣術は勘弁してくれよ・・・

ファブレ公爵「グランツ謡将は、明日ダアトへ帰国されるそうだ」

ルーク「そうなんですか？」

ヴァン「私がローレイ教の神託の盾の（オラクル）騎士団に所属している事は知っているな」

神託の盾の騎士団って、確かローレイ教団が総本山のダアト自衛ってことで持っている独自の軍隊ってやつだったよな・・・

うろ覚えだけでも

ルーク「はい、確か師匠は首席総長でしたよね」

ヴァン「そうだ。私の任務は神託の盾の騎士団を率いて、導師イオンをお護りするところにある」

ルーク「導師イオンって・・・」

シユザンヌ「ローレイ教団の指導者ですよ」

おっとお母様

もちろん存じ上げてますよ

というかヤバイヤバイ

知らん振りしとらんと・・・

シユザンヌ「導師のおかげでマルクト帝国と我がキムラスカ・ランバルディア王国の休戦が成立しているのです」

ヴァン「先代の導師エノベスがホド戦争終結の功労者なら、現導師イオンは今日の平和の象徴とも言える御方」

ファブレ公爵「そのイオン様が行方不明なのだそうだ」

あー、そうそうそうそう

なんか思い出してきたかも

ヴァン「私は神託の盾の騎士団の一員として、イオン様搜索の任につく」

まあ、そうは言ってますがね・・・

何も言わないけどさ・・・

ルーク「なるほど、そうでしたか。そうなると稽古は・・・」

ヴァン「私がキムラスカ王国に戻るまで、部下を来させよう」
ルーク「あ、ありがとうございます師匠」

いや、有難くないんだがな・・・
バレちゃうじゃないか

ファブレ公爵「・・・嫌に素直じゃないかルーク。また我儘を言うのではないかと思つたのだがな」

ルーク「師匠が忙しいのであれば仕方ないですし、それに部下の方が来てくれるなら剣術の稽古も出来ますしね」

いやルークロールプレイどうした俺

これ我儘言つとくべきだったか・・・

ファブレ公爵「グランツ諺将はいずれ戻られる。それまでは剣術の稽古を怠ることのないようにしなさい」

何でちよつとだけ口調強いのかしら

シユザンヌ「あなた！この子はさらわれた時に怖い思いをして、心に傷を負ったんですのよ」

お母様や・・・急にフォローしてくれるやん

しかしながら杞憂が過ぎるのでは？

シユザンヌ「そのせいで子どもの頃の記憶まで失って・・・可哀想だとは思いませんの？」

フアブレ公爵「シユザンヌ。おまえは少し甘やかしすぎだ」

ヴァン「ですがお屋敷に閉じ込められたこの生活は、けして恵まれた物でもないでしょう」

急に俺の話になるじゃん・・・

ルーク「・・・まあ確かに、国王の命令とは言え、外くらいには出させて欲しいです

けど・・・」

シユザンヌ「それは兄上様がおまえの身を案じておられるからですよ。あと三年で自由になれるのです。もう少し我慢なさい」

身を案じる・・・ねえ

まあそういう事にしておこう

ヴァン「元気を出せ、ルーク。しばらく手合わせできぬ分、今日はとことん稽古に付き合おうぞ」

え・・・

それはちよつと・・・

ヴァンが立ち上がる

ヴァン「では、公爵。それに奥方様。我々は稽古を始めますので」
ファブレ公爵「頼みましたぞ、グランツ謡将」

こつちを見るヴァン

ヴァン「私は先に中庭に行く。支度がすんだらすぐ来るように」

一礼をして応接室を後にするヴァン

終わった・・・

いよいよバレルカウントダウンが始まったか・・・

とりあえず木刀取りに行くか・・・

部屋にあるだろきつと

続いて応接室を出ようとする

シュザンヌ「おお、ルーク。くれぐれも怪我のないようにね」

心配性もここまで来ると大変だな・・・

こりゃルークグレちゃうよ

ルーク「大丈夫ですよ母上。行って参ります」

会釈をし、応接室を後にする

ファブレ公爵「・・・ルーク、随分と大人びたようだな」

シュザンヌ「ええ、あの子も公爵子息としての自覚が出来てたということなのでしようか」

ファブレ公爵「・・・ふむ」

シュザンヌ「なればこそ、あの子には危険な真似はさせたくないのですが・・・」

ファブレ公爵「・・・」

考え込むファブレ公爵

ルーク「木刀・・・木刀つと」

確かルークスタイルって後ろに剣をさしてたよな

ルーク「・・・こんな感じか」

腰の後ろに帯刀する

ふと、ベッドに置いてあったブレスレットを見つける

何この装飾のブレスレット・・・すげえ豪華だな・・・

稽古には必要無いけど、お洒落がてら持つていくか

とはいえ、稽古中は着けるのはやめとこう

普通にヴァンに怒られそうだからな

ブレスレットをポケットにしまい、中庭に急ぐ

中庭にはヴァンとガイが居た

ガイ「なるほどねえ。神託の盾の騎士団様も大変だな」

ヴァン「だからしばらくは、貴公に任せるしかない。公爵や国王、それにルークの・・・」

ペール「ルーク様！」

声をかけられる

ペール、そんな一礼なんてせんでもいいのに

ルーク「おう、悪いな仕事中に」

ペールに声をかける

またラムダスに小言言われるかもしれないな

まあそんな時はそんな時だ

ルーク「お待たせしました師匠。あれ、ガイ何してるんだ？」

ガイ「ヴァン 謡将は剣の達人ですからね。少しばかりご教授願おうかと思ってるね」

ルーク「そんな感じには見えなかったよ」

不意に妙な悪寒が走る

ルーク（・・・なんだ？何か・・・来る？）

なんだっけ・・・何が来るんだっけ・・・

――玄関

??? 「トウエ レイ ズエ クロア リョ トウエ ズエ」

1人の侵入者が現れた

歌の旋律により、兵士達が次々と眠りにつく

??? 「・・・」

黙々と歩き進める

ただ一つの目的の為に・・・

——中庭

ヴァン「・・・ルーク！聞こえないのか！」

うお!?

ルーク「あ、はい！」

いかんいかん、マジでボーっとしてたわ

ヴァン「準備はいいのか？」

ルーク「大丈夫です」

ベンチに歩みを進めるガイ

ガイ「それじゃ俺は見学させてもらおうかな。頑張れよ、ルーク」
ルーク「おう、任せとけ」

・・・と強気を見せるものの
ヤバイよヤバイよこれ
とりあえず構えておくか・・・

ヴァン「・・・？」

え、何その目は
おかしな事言つたかな俺・・・

ヴァン「ルーク、いつから利き腕を矯正した？」

言われてハツとした

ルーク「そういえば左利きだあ!!」

さてどう言い訳するう?

ルーク「ああ、まあ何かと右利きの方が利便性もありますし、テーブルマナーとかでも右利きの方が良いですし・・・えーっと」

ダメだ・・・都合よく良い言い訳出てこねえよ・・・

ヴァン「感心したぞルーク」

あら? セーフ?

危ねえ危ねえ・・・

ルーク「なので、コレからは右手でやってみようかと」

ヴァン「なるほど。おまえなりに考えたのだな。良いだろう」

どうやら身バレ回避のようだ・・・

さてと、ここからどうすつかな・・・

ヴァン「それでは早速だが、技の訓練に移る」

早速オワタ・・・

いきなり過ぎるだろ・・・

ヴァン「ルーク、準備はいいか？」

良い訳がないだろ・・・しかし・・・

ええい！ままよ！

ルーク「・・・いつでもいけます」

ヴァン「お前に教えた技は『双牙斬』だ。覚えているな？」

ルーク「はい、師匠」

いいえ、師匠・・・

出来る気がしないです・・・

ヴァン「よし、では早速やってみなさい」

腹括るか・・・

確か振り下ろして切り上げながらジャンプするアレだよな

初期技だからこそめっちゃ覚えてるよ

後はやれるかどうかだが・・・

ヴァンが用意した人形に向かって走る

ルーク「双牙斬!!!」

気合いと共に斬りつける

斬り下しと斬り上げの2段攻撃は案外普通に出来た

しかもゲームで見たあの動きで

ルーク「・・・うお、出来たわ・・・」

あ、声に出てたかも・・・

ヴァン「よし、いいぞ」

微笑みながらヴァンが語る

ヴァン「よくぞ体得したな。すでにその技はおまえのものだ」

正直びつくりしたわ・・・

中身が違っても体はルークそのものだから出来たのか・・・

これはルークに感謝だな・・・

ルーク「ありがとうございます、師匠」

俺の心配は他所に何だかんだで稽古が進んだ

どうやらヴァンの指導は普通に上手いようだ・・・

超初心者俺でも理解出来るように解説を入れてくれる

これはルークもヴァンを慕うわけだ

・・・と感心していた時だった

??? 「トウエ レイ ズエ クロア リヨ トウエ ズエ」

ルーク 「！」

ヴァン 「この声は・・・!!？」

ヴァンが膝から崩れ落ちる

ルーク 「体が・・・動かねえ・・・」

ペール 「これは譜歌じゃ！お屋敷に第七音素術士（セブンスフォニマー）が入り込んだか!？」

ガイ 「くそ・・・、眠気が襲ってくる。何をやってるんだ、警備兵たちは！」

この声といい、この譜歌といい・・・恐らくこれは・・・
間違いない・・・

屋根の方に目をやる

??? 「ようやく見つけたわ。．．．裏切り者ヴァンデスデルカ。覚悟！」

遠目とはいえ．．．可愛いな．．．

さっすがジアビスのヒロイン．．．

って言ってる場合じゃないよなこれ．．．

ヴァン 「やはりおまえか、ティア！」

ギリギリの所でティアのナイフを躲すヴァン

おお、流石ヴァン

やるやんけ

．．．じゃなくて!!

ルーク 「おい！やめろって！」

無意識に木刀をティアに振るう

何故そうしたのかは分からない・・・
でも体がそうさせたような気がした

ヴァン「いかん！やめろ！」

それに気づき、ティアが木刀を止める

その時だった

『響け・・・・・・ローレライの意思よ届け・・・・・・開くのだ！』

ルーク「うっ！また声が・・・！」

ティア「これは第七音素（セブンスフォニム）!？」

その瞬間だった

2人は爆発音と共に飛ばされてしまった

ルーク「うわあああああああ!!!」

ティア「きやああああああ!!!」

その場に2人の姿はなかった

ヴァン「しまった……。第七音素が反応しあつたかつ！」

こうして、聖なる焰の光（パチモン）の物語は始まった

どうして俺がルークとして生まれたのか……。その意味が全く分からないまま……

3

目が覚めたら超振動で吹っ飛ばされてた

「・・・ルーク・・・起・・・」

・・・おやおや・・・？

どうやら美女が俺に語り掛けているようだ・・・

これは夢だな・・・

独身男性の悲しき夢よ・・・

「・・・起きて、ルーク！」

ふお!?

ルーク「ん・・・きみは・・・」

ティア「よかった……。無事みたいね」

ふむ……

可愛い………

あ、そんなこと言ってる場合やない！

ルーク「ここ……どこなんだ……？」

ティア「さあ……。かなりの勢いで飛ばされたけど……」

もうほぼワープよねコレ

良かったよとりあえず五体満足で

ティア「プラネットストームに巻き込まれたのかと思っただけ……」

プラネットストームって確か惑星の活動を利用したエネルギーの永続供給機関の事
だったよな、簡単に言うただけだ

いやはや危うし危うし……

あ・・・それよりも・・・

ルーク「・・・君、怪我は無いか？」

まあこんな無様な姿晒しながらカッコつけるのもあれだけど、心配よね
怪我しちやったりしてたらマズイし

ティア「・・・あ・・・ありがとう」

なんやなんや？

可愛ええなおい

オジサンにつこりよ・・・

立ち上がろうとした時だった

ルーク「あつ・・・いてててて！」

・・・カッコつけが台無し

どうやら全身を打ったみたいだなこりや・・・

ティア「待って、急に動かないで。どこか痛むところは？」

あら優しい

なんて出来た子なのかしら

オジサン感激

ルーク「ああ、大丈夫。ありがとな」

よっこらせつと腰を上げる

ルーク「少なからず、2人とも無事みたいだな」

ティア「ええ、不幸中の幸いね」

さてつと・・・

俺はティアのこと知ってるけど、とりあえず自己紹介しとくか

お互いを知る為に

ルーク「・・・一応自己紹介だけはしとくか。俺はルーク。ルーク・フォン・ファブ
レだ。よろしくな」

急に俺が『ティア』なんて呼んだら流石に警戒されるしな

ティア「私はティア。どうやら私とあなたの間で、超振動が起きたようね」

ルーク「超振動って、同じの振動数を持つてる音素が干渉して起こる現象だったっけ
か」

ふっふっふ・・・

元ジアビスオタクを舐めんよ？

そこら辺の用語は詳しいぜ？

ティア「え、ええその通りよ。詳しいのね」

・・・やっべ

ルークロールプレイモロ無視してしもーた
こんなのルークの設定ガン無視やんけ！

ルーク「あ：：いや、家庭教師がそんな事言つてたっけな：：ははははは：：」

く・・・苦しい・・・

苦しすぎる言い訳や・・・

ティア「そう」

あれ？

全然突っ込んでこないな・・・

ティア「通りで王家に匿われていた訳ね」

ルーク「お・・・おう」

家庭教師の部分はスルーなのね

まあ良かった・・・セーフセーフ・・・

後ろを振り向くと、白い花が咲いていた

そこには淡く光る月

・・・現代社会では見られない、本当に綺麗な光景だった

ルーク「・・・綺麗だな」

不意に口から漏れた言葉だった

ティア「意外と落ち着いているのね」

さすがにティアに突っ込まれる

ストーリーを若干覚えているとはいえ、この状況でさすがに落ち着き過ぎてるよ
な・・・

ここはひとつ・・・自分のフォローをせねば・・・

ルーク「いや・・・正直ビビってるよ。でも無理矢理にでも落ち着いてるフリしとかないと混乱しちゃうだろ？」

ふう・・・0点だなこりゃ

ティア「そうね。混乱や焦りは、周囲の警戒を鈍らせるわ。心構えとしては上出来ね」

あつぶね・・・

ティアが軍人思考で良かった・・・

ルーク「さて、これからどうするか」

とりあえず目の前の問題からだよな

ティア「あなたをバチカルの屋敷まで送って行くわ」

ルーク「・・・なんか悪いな。ここからの土地勘はあるのか？」

素朴な疑問だ

正直言うところここがタタル渓谷という事は知っている

とはいえ、詳しく土地の位置関係が分かっている訳じゃないからな

ティア「向こうに海が見えるでしょう」

指を指すティア

せやな、海やな

ルーク「ああ」

ティア「とりあえずこの渓谷を抜けて海岸線を目指しましょう」

名案だな

さつすがティアさんつす

ティア「街道に出られれば辻馬車もあるだろうし、帰る方法も見つかるはずだわ」
ルーク「近くに川があるっぼいな。まずは川沿いを下っていくか」

近くに水音がするしな

とりあえず進む方向で行くか

ティア「さあ、行きましょう」

ルーク「あいよ」

水音のする方へ歩みを進める

しっかしいよいよを以て自覚してきたな……

本当に俺……ルークになったんだなあ

嬉しいより不安の方が強いんだが……

いや嬉しいんだけどさあ……

今後の展開とか色々考えると……

こりゃ……長い旅路になるぞ

とか考えてた時だった

——ガサガサ

ティア「・・・魔物っ」

ルーク「魔物・・・!？」

ティア「来るわ！」

ルーク「マジか・・・」

木刀を抜く

勝てるかしら・・・

いや、勝たないとマジで死ぬぞ・・・

腹括るか！

ルーク「ティア、援護頼んだ」

ティア「了解よ」

茂みから現れたのは、猪のような魔物、サイノツサスだった

「グオオオオ」

ルーク「うおおおお！」

とりあえず魔物に突っ込む

というより突っ込む事しか出来ん……

木刀で何とかサイノツサスを捌く

ティア「深淵へと誘う旋律……トウエ　レイ　ズエ　クロア　リョ　トウエ　ズエ」

ティアがナイトメアを詠唱する

「グ……グオ……」

怯むサイノツサス

完全に隙だらけだ

ルーク「もらったあ！」

渾身の技を放つ

ルーク「双牙斬!!」

「グオ………」

何とかサイノツサスを倒すことが出来た……
体感的に20レベルは上がった気分や……

ルーク「はあ……はあ……倒せたわ……」

肩で息をする

疲れたというより、緊張感からの解放から来るやつ

ティア「実戦は初めてかしら？」

ルーク「恥ずかしながら、そうなんだよ。ずっと屋敷の中で暮らしてたからな」
ティア「その割には、随分と的確に魔物を捌いたわね」

え!?マジで?

割と我武者羅だった感が否めないけど・・・

ルーク「一応、稽古つけてもらってたからな。まあ実践と稽古は全然ちがうけど」
ティア「・・・そう」

さて、初戦は勝利したが・・・今後も戦闘が課題になつてきそうだな
まだティアと一緒にいいが、一人だとマジでヤバいかもな・・・
仲間って大事だわ

ルーク「んじゃ、先を急ぐか」
ティア「ええ」

川に向かって進む

ルーク「……」

ティア「……」

「……ちよつと……気まず！」

何か「……何か話さんと……」

ええつと「……あの……」

好きな食べ物？好きな映画？好きなテイルズシリーズ？

いやいやアホか俺

とにかく何か……

ティア「……聞かないのかしら？」

ルーク「え？」

急に話しかけてきますやん

ルーク「何をだ？」

ティア「私が屋敷に乗り込んできた理由を」

ルーク「ああ・・・」

いや・・・聞いたくべきだったのかな・・・

ダメだな俺・・・

そこら辺のルークロールプレイが全く出来てないな・・・
でも今の段階で聞くべきでもないよな

ルーク「・・・込み入った事情があんだろ？無理には聞かないさ」

ティア「・・・」

ルーク「まあ落ち着いた時にでも話してくれりや良いさ。今は今の問題を解決しねー
と」

ティア「ルーク・・・」

今更だけでもうルークとは全く別の展開になりそう・・・

だってこの時のルークって確かめちやめちやティアに突つかかってたもんな・・・

なんというかゲームやって可愛そうになったもん・・・

何戦か魔物との戦闘があつたが何とか渓谷を抜けられそうだしやはや・・・生きてるって素晴らしい・・・

ティア「出口よ！」

ルーク「ふう・・・何とか抜けれたな・・・」

遠くの方から足音が聞こえる

ティア「誰かくるわ」

ルーク「下がってろティア！」

ティアの前に出る俺

木刀を抜く準備は出来ている

内心膝ガクブルちよんちよこ丸ですけど・・・

??? 「うわっ！あ、あんたたちまさか漆黒の翼か!？」

あ、辻馬車のおつちゃんやコレ

ティア「・・・漆黒の翼？」

??? 「盗賊団だよ。この辺を荒らしてる男女三人組で・・・って、あんたたちは二人連れか・・・」

ルーク「ああ、人違いだよ。少なくとも盗賊じゃないよ俺たち」

ティア「私たちは道に迷ってここに来ました。あなたは？」

ティアが辻馬車のおつちゃんに近寄る

??? 「俺は辻馬車の馭者だよ。この近くで馬車の車輪がいかれちゃってね」

おお、それは不運な・・・

馭者「水瓶が倒れて飲み水がなくなっただんで、ここまで汲みにきたのさ」

ティア「馬車は首都へも行きますか？」

馭者「ああ、終点は首都だよ」

・・・言うべきだろうか

これは実は首都って言ってもバチカルでは無いということを・・・

・・・いや・・・黙ってた方がいいだろう

物語の進行的な意味で・・・

ルーク「・・・なら、乗せてもらおうとするか。ちつとばつかし疲れたしな」

俺が、というよりもティアの方が心配だ

女の子の体力でこの渓谷は酷だろうしな・・・

ティア「そうね。私たち土地勘がないし、お願いできますか？」

馭者「首都までとなると、一人12000ガルドになるが持ち合わせはあるかい？」

ティア「高い・・・」

ルーク「それな・・・」

・・・財布・・・持ってきてねえな

ルーク「現金つて後払いで平気？」

馭者「そうはいかないよ。前払いじゃないとね」

くっそお・・・足元やがって・・・

いや向こうも商売だし、しょうがねえか・・・

ティア「・・・これを」

ティアが物悲しげに何かを取り出す

おい、これってまさか・・・

馭者「こいつは大した宝石だな」

このペンダント・・・記憶が正しければ・・・

ルーク「待てよティア」

ティアを止める

さすがにそんな事させてまで乗ろうとは思わねえよ！
まあ本物のルークは乗ったんだけどな・・・

ティア「・・・何？」

ルーク「大事なもんなんだろ、それ」

ティア「・・・」

ルーク「それはちゃんとしっかり持っておけ」

ティアのペンダントを戻させる

ティア「・・・でも、今支払えるのなんてコレしか・・・」

ルーク「・・・いや待てよ」

おいおいおい運良すぎだろ俺
確かポケットの中に・・・

ルーク「おつちゃん。コレはどうだ？」

ポケット入れててすっかり忘れていたブレスレットを見せる

馭者「ほお、こいつもまたいい宝石のブレスレットだな」

ルーク「だろ？これで何とか手を打ってくれねえかな？」

馭者「・・・よし、乗ってきな」

交渉成立

危ねえ危ねえ・・・

ティア「ルーク！そんな高価な物を！」

ルーク「良いんだよ。元々着ける予定無かったしな」

そもそも持つてる事すら忘れてたし

ルーク「ほら、さっさと行くぞティア」

ティアを催促する

ティア「……ごめんなさい……ルーク」

程なくして辻馬車に乗り込む2人

ルーク「……」

ティア「……」

．．．う．．．

気まずい沈黙．．．

こういう空気感ダメなのよ．．．

喋ろうと思ってもな．．．

窓の外をボーッと眺めながら考える

ティア「ルーク．．．」

沈黙が破られた

ルーク「どうした」

ティア「．．．お礼を言いたくて」

何や何や

お礼とな？

ルーク「なんだよ急に」

ティア「このペンダント、母の形見なの……」

さっきの宝石のペンダントを取り出し、ティアが語る

……俺の記憶は正しかった

何百のサブイベントの中で結構印象に残ってたからな

ルーク「そうだったのか……。なら尚のこと大切に持つとけ」

ティア「ええ……。ありがとう……。ルーク」

まあ、今回はマジで運が良かったただけだな……

たまたま持ってたブレスレットに感謝や

まあもし持ってなかったとしても、あのペンダントは売らせられないよな

ティア「この代金は、ちゃんと返すわ」

ルーク「別に気にすんなって。俺だってお前には感謝してるんだよ」

ティア「え？」

ティアがキョトンとする

ルーク「渓谷の戦闘だつて俺一人じゃヤバかったし、助かつてるよ」

事実だなこれは・・・

是非とも俺を一人にしないでくれ、ティア

あつさり死んじやうから俺

ルーク「こんな非常事態なんだ、助け合いつて事で良いんじゃないか？」

ティア「優しいのね、ルーク」

ふっへへへ

そんな可愛い顔しちゃつて

オジサン照れるで

ルーク「別にそんな事ねーよ」

再び窓の外の景色を見る

照れ隠しですがね

そうこうしていた時だった

外から爆撃音が聞こえる

ルーク「・・・な、なんだ!？」

外を見ると、馬車を追いかける戦艦が近づいて来た

ルーク「あの馬車、攻撃されてるぞ」

馭者「軍が盗賊を追ってるんだ！ほらあんたたちと勘違いした漆黒の翼だよ！」

???「その辻馬車！道を空けなさい！巻き込まれますよ！」

アナウンスが聞こえる

おいおいマジでぶつかりそうなんだが！

装甲艦が辻馬車をスレスレに躲す

なんのアトラクションだよ！

「――陸上装甲艦タルタロス

「師団長！敵がローテルロー橋を渡り終え、橋に爆薬を放出しています！」

「???」 「おやおや。橋を落として逃げるつもりですか？」

「フオンスロット起動確認！」

「敵は第五音素（ファイスフォニム）による譜術を発動させました！橋が爆発します！」

「???」 「タルタロス、停止せよ。譜術障壁起動！」

「了解！タルタロス停止！」

「譜術障壁起動！」

橋が激しい轟音と共に落ちる

それと同時にタルタロスの障壁が展開された

ルーク「やっぱ・・・すげえな」

馭者「驚いた！ありやあマルクト軍の最新型陸上装甲艦タルタロスだよ！」

すげえええ!!!

生のタルタロスはやっぱすげえわ!!

ちよつと写真撮りたいんだが!!

カメラ持ってねーわ

ティア「マルクト軍？どうしてここにマルクト軍が？」

馭者「当たり前さ」

・・・せやな

だってここって・・・

馭者「何しろキムラスカの奴らが戦争を仕掛けてくるって噂が絶えないんで、この辺りは警備が厳重になってるからな」

ティア「・・・ちよつと待って？ここはキムラスカ王国じゃないの？」

そうなのよティア・・・

違うのよここ

知ってたけど言わなかったオジサンを許して・・・

馭者「何言ってるんだ。ここはマルクト帝国だよ。マルクトの西ルグニカ平野さ」

ルーク「つて言うことは、向かってる首都って・・・」

馭者「向かってるのはマルクトの首都、偉大なるピオニー九世陛下のおわすグランコクマだ」

分かってて聞きましたよ、ハイ

そうなんすよ、グランコクマなんすよ

もうこの際観光がてら行ってもいい説まである

ティア「・・・間違えたわ」

ルーク「見事にやつちまったな」

ティア「ごめんなさい。土地勘がないから・・・」

ルーク「んにや、別に責めてないって。俺だって全然分かんねえからな」

・・・責められるべきは俺か

知ってて言わなかったもん

オジサンを許してティア・・・

馭者「・・・なんか変だな。あんたらキムラスカ人なのか？」

ティア「い、いいえ・・・その・・・」

ええ!!??

そこで言い淀んじやうのお!?

フオローせんと!!

ルーク「ちよつとバチカルに用事があつてな。向かつてた途中だったんだ」
馭者「それじゃあ反対だったなあ」

ふう・・・セーフセーフ

ここでバレたらヤベエ事になつちまうよ

馭者「キムラスカへ行くなら橋を渡らずに、街道を南へ下つていけばよかつたんだ」

橋つて、さつき漆黒の翼がぶつ飛ばした橋だよな

馭者「もつとも橋が落ちちやあ戻るに戻れんが・・・」

ルーク「そつか・・・どうしたもんかな・・・」

馭者「俺たちは東のエンゲーブを経由してグランコクマへ向かうがあんたたちはどうする?」

グランコクマまで・・・デートするかい?

ええんやでティア?

「ティア「さすがにグランコクマまで行くと遠くなるわ」

・・・そうツスね

まあそりやそうだ

デート気分なの俺だけでもんな

ティア「エンゲーブでキムラスカへ戻る方法を考えましょう」

ルーク「そうだな。おっちゃん、エンゲーブまで頼むよ」

馭者「そうかい。じゃあ出発だ」

エンゲーブへと進む辻馬車

本格的に始まったルークロールプレイ

・・・いや何ひとつロールプレイ出来てないけどな

この時点でちよつとずつストーリーとは違う事してるけど、あまり影響はないみたい
だな

だとしたら、俺にはやりたい事がある

このゲームは本当に死人が沢山出る

俺自身、このジアビスが好きだからこそ生きて欲しい人達が沢山いる

もしかしたら俺がルークとして生まれた意味って、このジアビスの世界を改変するた
めに来たのかな・・・

・・・いや・・・今の時点じゃ何にも分かんねーな

何にせよ、俺自身がこのジアビスの世界をもう一度体験するんだな

気合い入れとかねえとな

・・・

次って確か・・・

ルーク「ミユウ・・・か・・・」

ティア「え？何か言ったかしら？」

口に出たやないかい！

ルーク「え!?!いや、何も言ってるよ？」

ティア「そう？」

無意識に口に出ちまう癖マジで治さねーと・・・

・・・そう・・・次はミュウとジエイドそれにイオンとの出会いと、とある少女の因縁の始まりが起こる

ライガ・クイーン・・・

さて、どうしたもんかな・・・

4 気がついたら泥棒呼ばわりされてた

——食料の村エンゲープ

馭者「ここがエンゲープだ」

おお！

ホント長閑でいい村だな！

こういうファンタジーな世界観の村大好き

馭者「キムラスカへ向かうなら、ここから南にあるカイツールの検問所へ向かうとい
い」

ルーク「検問所か・・・」

馭者「それじゃ、気をつけてな」

ルーク「おう！おっちゃんもありがとな」

馭者に手を振る

何だかんだええおっちゃんやな

助かつちまつたよ

ティア「検問所……。旅券がないと通れないわね。困ったな……」

ルーク「旅券って簡単に発行してもらえるもんなのかな……」

ティア「うーん……」

まあまあとりあえず難しい事は後で考えるところ……

その前にやる事があるっしょ!!

ルーク「まあややこしい事は後々考えるところとして、ちよつとこの村探検してみないか？

色々見てみてえよ！」

ティア「……探検はともかく、出発前の準備は必要ね。今日はここに泊まりましょ
う」

と・・・泊まる・・・だつて・・・？

ティアと・・・2人で・・・

おいおいおい！

なんとというビッグイベントや！

ルーク「そうだな。野宿になるかもとか思ってたけど、そんな心配要らないもんな」
ティア「お屋敷暮らしのあなたにとっては、野宿は辛いでしょ？」

野宿はさすがにした事ないけど、キャンプならあるな!!

・・・ある種似たようなもんかもな

ルーク「別に抵抗はないな。何なら面白そうだし」

ティア「・・・意外な反応ね。もつと嫌がると思ったのだけれど」

ルーク「野宿か宿かって言われたらそりや宿の方がいいけどな」

ティア「それは私も同じよ」

・・・そりやそうだな

ふかふかのベッドか硬い地面の所に寝袋かって言われたら満場一致でベッドですわな

ルーク「しかし、色んな食材があるんだなあ」

ティア「ここは農作物の栽培や家畜の飼育をしている村なのよ」

ルーク「村の人達も活き活きしてる訳だな。豊かな自然や環境つつうのは人の心も豊かにするつてもんだ」

ティア「・・・ねえルーク」

ルーク「なんだ？」

ティア「あなたたつて本当にお屋敷育ちななの？」

・・・しまった

当たり前だけど『俺』はワンルームのアパート育ちだからな・・・

正直お貴族様の感覚なんてわつからん・・・

ルーク「いやそうだけど、なんだよ・・・」

ティア「考え方の感覚が、何と云うか庶民的と思ったのよ」

すうー……

庶民ですうー……！

ルーク「悪かったな庶民的で……」

ティア「いいえ……ごめんなさい、悪く言っているつもりはないのよ」

ルーク「……の割に顔笑ってんぞー」

顔を手で隠すティア

しようがないだろ！

金持ちの感覚なんて分かるわけが無いだろ！

ルーク「失礼な奴だなーお前は」

ティア「でも、とても良い事だと思っわ。同じ目線から物事を捉えられるというのは、誰でも出来ることじゃないわ。特に貴族や王族とかわね」

ルーク「そういうもんなのかね」

ティア「そういうものなのよ」

歩きながらそんな会話をしている最中、宿屋で人集りができているのに気づいた何かあったのか？

ルーク「なんだなんだ？」

ティア「これじゃあ宿屋に入れないわね」

ルーク「落ち着くまで村を回ってみるか」

とりあえず村をぶらつく方向にシフトチェンジ！

いや寧ろこれがメインまである！

いやいや良いねー良いねー！

・・・ティアと一緒に泊まりの方がメインか？

いやまあそれはさておき・・・

ルーク「お！美味そうだな、このリンゴ」

商人「おうさ！採れたて新鮮だよ！」

ルーク「ティア、お前も食べるか？」
ティア「私は平気よ」

あら残念

こんなに美味しそうなのに

あ、ていうかちよつと待てよ・・・

ルーク「そういえば金持ってねえわ・・・」

商人「おいおい兄ちゃん。タダって訳にはいかないぞ」

ティア「魔物が落としたお金ならあるわ」

おお・・・そうだった危ねえ危ねえ・・・

危うく盗つ人よ

これじゃあ序盤のルークと殆ど変わらなくなつちまう

・・・あ、いや俺ルークじゃん

リンゴ食つとくべきだったか・・・？

・・・ちよつとそれは出来ねえな

ルーク「すっかり忘れてたよ……おっちゃん、幾ら？」

商人「一つ34ガルドだよ」

ルーク「うっし、じゃあコレで」

ガルドを渡す

・・・そういえば深く考えなかったけど、何で魔物がお金落とすんやろ

その辺は考えない方がいいか

頭バグる

ルーク「ティア、ナイフ持ってるか？」

ティア「ええ」

ティアからナイフを受け取る

ナイフを使ってリングを半分に切る

ルーク「ほら、お前の分」

切った片方のリングゴをティアに渡す

ティア「いや・・・私は」

ルーク「なんか俺だけモリモリ食ってんの気まずいしな。それともリングゴ嫌いか？」

ティア「いや・・・嫌いじゃないけど」

ルーク「なら、ほら食べな。半分こってヤツだ」

差し出したリングゴを受け取るティア

ティア「・・・ありがとう」

小声でお礼を言うティア

オジサンは聞き逃さなかつたぜ・・・

可愛いったらありやしないわホント

ルーク「うんま！めっちゃめっちゃ甘いしジューシーじゃん！」

ティア「ええ、本当」

リングを二人で頬張りながら宿屋の方を覗く
まあごめん。次の展開もう知ってた・・・

多分食料庫の食材が・・・

ケリー「駄目だ・・・。食料庫の物は根こそぎ盗まれてる」

村人「北の方で火事があったからずっと続いているな」

村人「まさかあの辺に脱走兵でも隠れてて食うに困って・・・」

村人「いや、漆黒の翼の仕業ってことも考えられるぞ」

ですよね・・・

さてと・・・どうしたものか

ルーク「漆黒の翼の奴らって、何でも盗むもんなのかな」

ティア「盗賊団ならやりかねないと思うわ」

・・・またこのパターンや

言うべきか言わざるべきか

でも言つて信じてくれるもんなのかな

聖獣の仕業ですよーなんて・・・

ルーク「なあなあ。本当に漆黒の翼つて奴らの仕業なのか？」

ケリー「ん？なんだお前たちは」

ちよつと喧嘩腰やないですか・・・

もつと冷静にですね・・・

ルーク「いや、もし魔物の仕業とかだったら何か痕跡みたいなもんとかあるんじゃないのかなつてき。もつと冷静になつた方が良いと思うぜ？」

村人「俺たちが一年間どんな思いで畑を耕してると思つてる!!冷静にいられるわけないだろ!!」

ヒエツ!!

そんなに怒らんでも・・・

あ、いや・・・そりやそうか

当事者じゃないとどうしたって他人事みたいになっちまうな・・・

コレは俺が悪いな・・・

商人「なあ、ケリーさんのところも食料泥棒が来たって？」

あらさっきのリングゴ買った商人の人やん

ちよつとこの可愛そうな俺を助けて

商人「おまえ、さっきの奴らじゃないか！怪しいと思つたが、まさかお前が食料泥棒なのか！」

ナ・・・ナンダッテー!?

ケリー「何だと・・・まさかあんたがうちの食料庫を荒らしたのか！」

村人「泥棒は現場に戻るって言うしな」

おいなんだこの感じ！

完全に泥棒を見る目やん！

ルーク「待て待て待て！何で俺が泥棒になっちまうんだよ！」

商人「うちの店先ん時の様子が怪しかっただろ！」

ウツソだろ!?

どんだけ俺に厳しい世界だよ！

お金持つてねえかと思つてキョドっただけですよん！

ティア「待つてください!! 私たちはさつきこの村に着いたばかりです! ルークも悪気があつた訳ではありません!」

ああティア・・・

この空間で味方はキミだけだよ・・・

つーか俺そんなにおかしい挙動してた？

ルーク「いやホントそれよ！お金が無いかもって思ってただけだってば！」
ケリー「いや！確かに怪しいヤツらだ！役人につきだしてやる！」

・・・いや、逆にチャンス到来か？

これなら・・・

ティア「そんな！私たちはー！ー！ー」

ルーク「ティア、大人しく連行されよう」

ティア「・・・!!でも!!」

ルーク「実際俺たちは犯人じゃねえんだ。疑いを晴らしてくれねえ限りこの村で滞在もしにくいだろ。すぐに誤解だつて分かってもらえるさ」

ティア「ルーク・・・」

ルーク「大丈夫だつて。俺を信じてみる」

ティア「・・・わかったわ」

ローローズ夫人邸

ドカツ!!

蹴り入れられる俺

お前からホント・・・

これ俺じゃなかったらブチギレ案件やで？

村人「ローズさん、大変だ！」

ローズ「こら！今、軍のお偉いさんが来てるんだ。大人しくおしよ！」

床にぶつ倒れてる俺の首根っこを持ち上げる

ワシは猫か！

ケリー「大人しくなんてしてられねえ！食料泥棒を捕まえたんだ！」

ルーク「いや、完全に人違いなんですけどね・・・」

村人「ローズさん！こいつ漆黒の翼かもしれないねえ！」

村人「きつとこのところ頻繁に続いている食料泥棒もこいつらの仕業だ！」

こいつ『ら』つて!!

いつの間にかティアまで泥棒扱いになっとる・・・

おまえら・・・俺のジャステイス・クリティカル・レイディアント・ハウルぶつぱな
すぞこら

ルーク「俺もティアも泥棒なんてするかっての!!」

おいコラ
というか俺だけならともかく、複数形でティアまで泥棒扱いは普通にキレそうだがな

ルーク「俺だけならともかく!俺の連れまで泥棒扱いしてんじゃねえよこら!!」

ティア「ル・・・ルーク・・・」

ローズ「おやおや、威勢のいい坊やだねえ。とにかくみんな落ちついとくれ」

???「そうですよ、皆さん」

俺たちに近づきながら話す

この声は・・・

ローズ「大佐・・・」

振り向くと、眼鏡をかけた長髪に軍服の男がいた
まあ声だけで分かったよ

ルーク「あなたは・・・」

ジェイド「私はマルクト帝国軍第三師団所属、ジェイド・カーティス大佐です。あなたは？」

ルーク「お・・・おう、俺はルーク・フォーリーー」
ティア「ルーク!!」

自己紹介を寸前で止めるティア

というか・・・ティアさん？

首入ってる入ってる!!

ティア「忘れたの？ここは敵国なのよ！あなたのお父様ファブレ公爵はマルクトにとつて最大の仇の一人。うかつに名乗らないで」

ルーク「・・・ホントごめん。マジで流れて名乗りそうだった・・・」
ジェイド「どうかしましたか？」

俺たちに問いかけるジェイド
俺の代わりにティアが応える

ティア「失礼しました大佐。彼はルーク、私はティア」

冷静に対応するティア

・・・任せた・・・ティア先輩

ティア「ケセドニアへ行く途中でしたが、辻馬車を取り間違えてここまで来ました」
ジェイド「おや、ではあなたが彼の言っていた『連れ』ということですか？」
ティア「そうです。そもそも私たちは漆黒の翼などではありません」

そうだそうだー！

言つたれティア先輩！！

ティア「本物の漆黒の翼は、マルクト軍がローテルロー橋の向こうへ追いつめていたはずですが」

そうだそうだー！

俺たち危うく巻き込まれるところだったんだぞー！

ジェイド「ああ・・・なるほど。先ほどの辻馬車にあなたたちも乗っていたんですね」
ローズ「どういうことですか、大佐」

ローズ夫人がジェイドに問いかける

ジェイド「いえ。ティアさんが仰つた通り、漆黒の翼らしき盗賊はキムラスカ王国の方へ逃走しました」

そうだそうだー！

俺何にもしてない………

ダサすぎ……

ジェイド「彼らは漆黒の翼ではないと思いますよ。私が保証します」

イオン「ただの食料泥棒でもなさそうですね」

ジェイド「イオン様」

いや急に話に入ってくるやんけ！

いつから居たねんイオン様！

イオン「少し気になったので、食料庫を調べさせて頂きました。部屋の隅にこんなものが落ちていましたよ」

ローズ夫人に近寄るイオン

何かを渡す

……毛っすよね確か

ローズ「こいつは・・・聖獣チーグルの抜け毛だねえ」

イオン「ええ。恐らくチーグルが食料庫を、荒らしたのでしょう」

ふう・・・これで一件落着か

全然解決してないけどな・・・

ローズ「どうやら一件落着のようだね。あんたたち、この坊やたちに言うことがあるんじゃないのかい？」

ローズがケリーたちを睨む

ケリー「・・・すまない。このところ盗賊騒ぎが続いて気が立っててな」

村人「疑って悪かった」

村人「騒ぎを大きくしたことは謝るよ」

ローズ「坊やたちも、それで許してくれるかい？」

・・・うんうん！

間違いを認めて素直に謝れる大人！

素晴らしい！

謝れるということは本当に良いこと！

ルーク「俺も・・・悪かったよ。ちよつと言い過ぎたところもあつたし」

・・・そうだな

まあ俺だけならともかく、ティアまで悪者扱いは頭にきちやうよ

・・・完全に頭に血が昇つてたな

ローズ「そいつはよかった。さて、あたしは大佐と話がある。チーグルのことは防衛手段を考えてみるから、今日のところはみんな帰つとくれ」

村人たちが続々と夫人邸を後にする

それに続いて俺とティアも夫人邸を出た

出る前に何気なしにイオンの方を見る

・・・微笑まれた

頭を搔きながら扉を閉めた

ティア「ねえルーク」

ルーク「どうした」

ティア「咄嗟に庇ってくれて・・・ありがとう」

すうー・・・

何したっけ俺・・・

庇ってくれたの寧ろティアの方なのでは？

ルーク「・・・なんか言ったっけ俺」

ティア「・・・いいの。それより・・・」

ティアの言いたいことは分かる

そこだよな

ルーク「導師イオンが何でここにいるんだ・・・」

ティア「ええ、そうね・・・」

ルーク「俺が聞いた話だと、導師イオンは行方不明だつて言ってたぞ・・・」

ティア「そうなの？初耳だわ。どういふことなのかしら・・・。誘拐されてる風でもないし」

ルーク「・・・さすがに今お邪魔して本人に聞くのもアレだよな」

ティア「・・・ええ。大切なお話をしているみたいだから、明日以降にしましょう」

ルーク「そうだな」

一先ず最初の目的地であつた宿屋に向かう

・・・宿・・・屋・・・？

はあ・・・はあ・・・はあ・・・

いかんいかん・・・意識をしつかり保て俺!!

幾ら俺でも16歳の少女をそげな目で見ることは許されん・・・ツ!!

とりあえず自分の頬つぺたぶん殴つとこ・・・

ティア「・・・何してるの？」

一連の行動を見られてた・・・
やめて恥ずかしい・・・

ルーク「あ、いや・・・気合い入れだよ」

ティア「・・・？」

こんな内情とは知られてはいけない・・・

ティア「・・・それよりも、マルクト帝国のジェイド大佐・・・どこかで聞いたことがある気がするわ」

ルーク「え？そうなのか？」

・・・嘘です

本当はバツチリ知ってます

・・・こんな嘘つきオジサンを許して

ティア「ええ・・・誰だったかしら・・・」

そんな会話をしながら宿屋の扉を開ける

受付に見覚えのある少女が話をしていた

あの特徴的なぬいぐるみといい・・・この子は・・・

??? 「連れを見かけませんでしたかあ!? 私よりちよつと背が高い、ぼやくつとした男の子なんですけど」

ケリー「いや俺はちよつとここを離れてたから・・・」

??? 「もうイオン様だったらどこ行っちゃったのかなあ」

ルーク「導師イオンならローズ夫人の所に居たぞ？」

俺たちの方を向く少女

こう見るとやっぱ可愛いな

??? 「ホントですか!?!ありがとうございます♪」

駆け出す少女

ルーク「ああ、ごめんちよつといいかな？何で導師イオンがここにいるんだ？行方不明って聞いたぞ」

???「はうあつ！そんな噂になってるんですか！イオン様に伝えないと！」

勢い良く扉を開けていった

・・・扉くらいちゃんと閉めなさい

ルーク「訳、聞けなかったな」

ティア「そうね。でも彼女は導師守護役（フォンマスターガーディアン）みたいだから、ローレイ教団も公認の旅なんだと思うわ」

ティアが語りながら扉を閉める

ルーク「導師守護役……。信託の盾の騎士団の特殊部隊だったよな」

ティア「ええ」

ルーク「まあ明日のどっかのタイミングで訳を聞ければ良しとするか。何だかんだ

色々あつて疲れちまつたな」

受付にはさっきのケリーがいた

ケリー「あんたたち。さっきは済まなかつたな」

ルーク「もう大丈夫だつて。疑いも晴れたんだしさ」

ティア「気にしないでください」

ケリー「在らぬ疑いかけちやつたんだ。今日のところはタダにしておくよ」

ルーク「え!? ホントに!？」

ティア「ありがとうございます」

コレはありがてえ・・・

幾らだったか覚えてはないけど、これからの旅路だ

ちよつとでも節約してかねえと

リング食べちやつたけどな・・・

部屋に通された俺たち

ベッドが3つ・・・

ふむ・・・

まあ・・・これなら・・・

ティア「明日はカイツールの検問所へ向かいますよ。橋が落ちた状態では、そこかしこバチカルには帰れないわ」

ルーク「あとは、旅券をどうするかだな」

ティア「そうね。そこが一番の悩みね・・・」

ベッドに互い腰掛けながら語る

配慮の為、一応一つ間隔をあけて

・・・つかそうしないと緊張で寝れない

ルーク「話変わるんだけど、ティアはチーグルの事知ってるのか？」

ティア「東ルグニカ平野の森に生息する草食獣よ」

ルーク「確か、ローレライ教団の象徴だったよな」

ティア「ええ、その通りよ」

ルーク「そんな聖獣って言われてるような奴らが、食料を盗むとはねえ・・・」

・・・まあ理由は知ってますよ

こう・・・何も知らない事を装うのも一苦勞よ

・・・象徴の事も言うんじゃないかな

ティア「ちようどこの村の北あたりが住処だと思おうわ」

ルーク「なら、明日行ってみよう」

ティア「行ってどうするの」

理由は・・・ストーリー的に？

違う違う・・・そうじゃなくて

ルーク「聖獣って言われてるくらいなんだ。きつと知能だつてそこそこある筈だろ？
何かしらの理由があるんじゃないかと思つてさ」

ティア「それはそうかもしれないけど・・・」

ルーク「対話が出るかどうかは分かんねえけど、駄目元で行つてみたいんだ」

ティア「・・・そうね。なら私も付き合うわ」

付き・・・合う・・・だと？

それはつまり・・・彼女としてかい!?

・・・なんて馬鹿な事言ったらナイフでぶっ刺されちゃうな

ルーク「本当なら危険だからって言いたいところなんだけど、来てくれると助かるよ」

ティア「ええ、そのつもりよ」

ルーク「・・・悪いな」

ティア「ルークって、結構お人好しのね」

多分序盤のジアビスのルークに絶対言われないセリフランキング1位や・・・

これは・・・マズイか？

ストーリー的な意味で！

ルーク「べ、別にそんなんじゃないって!」

ティア「ふふ、そうね」

ルーク「か、揶揄うなよな! もう寝るぞ!」

掛け布団に潜る

・ ・ ・ 向こうに ・ ・ ・ ティアが ・ ・ ・
ど ・ ・ ・ ドキドキで寝れねえかも

ティア 「 ・ ・ ・ 」

ベッドに座りながら、今日の事を振り返っていた
本当に色々ルークに助けられてしまった ・ ・ ・

ルーク 『大事なもんなんだろ、それ』

溪谷での出来事・・・

ルーク『それはちゃんとしつかり持っておけ』

あの時そう言われなければ、私はコレを売り払ってしまっていた
母の形見である・・・コレを・・・
ペンダントを取り出し、ティアは思う

ティア「・・・」

ルーク『俺だけならともかく！俺の連れまで泥棒扱いしてんじゃねえよこら!!』

自分の為ではなく、他人の為に怒れる人
私は・・・

ティア「・・・」

そつとルークに近づく

寝顔は子供のようだった

ティア「何か・・・お礼になるものを・・・」

ふと、ルークの傍に置いてあつた木刀を見た

ボロボロで、今にも折れそうだった

木刀の傷跡は、今日の戦闘と彼の剣術稽古の努力が物語っていた

ティア「・・・そうだ」

ポツリとティアが言葉を零した

明日の早朝に買い物をしよう

せめて、お礼とこれからの旅路の為にも・・・

5 気がついたらストーリー捻じ曲げてた 前編

朝

・・・もとい、昼近く

ティア「・・・ーク？」

ああ、とつても寝心地よし・・・

コレならいくらでも寝れちゃう・・・

ティア「ルーク！いい加減起きて」

アレ・・・？・・・もう朝か

ルーク「……お……おはよー……」

目を開けると顔を近づけて起こすティアが目の前にいた

ルーク「うおおおおあああ!!」

驚いてベッドから転げ落ちる

いやいやどんなドツキリだよ!

独身男性にその起こし方は心臓に悪いんだぞ!!

ティア「驚かしちゃったかしら……?」

ひっくり返ってる俺に声をかける

……ええ……見たらおわかり頂けるであろう……

ルーク「寝起きで驚かすのやめてくれ……ホントビビった」

ティア「だってルーク全然起きないんだもの」

ルーク「全然って・・・俺どんくらい寝てたんだ？」

体感的には朝の7時くらいと予想

何だかんだ疲れてたから結構寝た感凄いけど

ティア「もうすぐお昼になりそうよ」

な・・・なんだと・・・!?

ウツソヤん!

寝過ぎた・・・!

ルーク「マジかよ!完全に寝坊したわ!」

ティア「まあ、色々あったんだし疲れてたのだと思うわ」

ルーク「ごめん・・・チーグルの住処に行くって俺が言い出したのに」

言い出しつpeg寝坊するとうダサさ

・・・面目ねえ

ルーク「すぐ支度する！ちよつと待っててくれ」

ティア「ええ・・・それと・・・」

ティアが剣を差し出す

ルーク「これって・・・」

ティア「これからの旅路に、木刀だけでは不安でしょ？・・・それに・・・」

ティアが口籠らせる

ティア「とにかく！これからはこれを使いなさい」

ルーク「マジか！ありがとなティア！・・・っってお金足りたのか？」

ティア「ええ大丈夫よ」

ティアからの贈り物・・・

大事に使わないと！

ルーク「わざわざ悪いな」

ティア「ルーク、謝ってばかりじゃない」

ルーク「・・・はっはっは。悪い」

ティア「ほら、また」

なんだこれ・・・

完全に口癖みたいになっちゃってる

ルーク「大事に使わせてもらうよ」

ティア「ふふ・・・」

買って貰った剣を腰に帯刀する

コレは・・・とても良いですな・・・

あ、そうだ

ルーク「この木刀・・・売れっかな」

ティア「どうかしら・・・１ガルド位には売れるんじゃないかしら・・・」
ルーク「ボロボロだしな・・・」

これ売ったら逆に迷惑になりそうですな
まあ持つてても仕方ないし・・・
売り飛ばしちまうべ！

支度を整え、宿を後にする
道具を整頓し、出発の準備を整える
・・・しっかし

ルーク「・・・へへへ」
ティア「どうかしたの？」

やべ・・・また声に出てたわ

ルーク「いやさ、こうしてしつかり武器を装備してるとき・・・。何か冒険が始まるって感じがしてさ！」

ティア「そういう所は子供っぽいね」

ルーク「べ、別にいいだろ!? 男っていうのは常に心に冒険心宿らせてるもんなんだよ！」

ティア「・・・男の子ってみんなそういうものなのかしら？」

ルーク「そういうものなんだよ」

多少大袈裟に言っただけど・・・俺だけじゃないよね？

そういうものだよな？

ルーク「さて、チーグルの住処に行くんだったよな。エンゲーブから北東の方だったっけ」

ティア「そうよ。でも、本当に真相を掴めるのかしら」

掴めるんだけどなあ・・・

この先のイベントって、俺的ジアビス鬱ランキングの一つのアレなんだよな・・・

ルーク「駄目元でつてやつよ。何か・・・気になるっていうか」

ティア「考えても仕方ないわ。行ってみましよう」

ルーク「まだ色々問題片付いてないけどな・・・。旅券の事とかイオンの事とか」

ティア「一先ずそれは後で考えるところでしょう。気になるのであれば行動してみるのも良いと思うわ」

ルーク「そうな。それじゃ行ってみるか！」

チーグルの住処に歩み進める

ローレルグニカ平野

グウロー・・・

お腹が鳴る

ルーク「……」

ティア「……」

ルーク「……聞こえたかね？」

ティア「隣を歩いているのだから聞こえるわ」

お恥ずかしい……

そういえば朝飯っていか昼飯っていか……食うの忘れてた

ティア「休憩にしましょう。食事を作るわ」

ルーク「え!?!作ってくれるのか!?!」

嬉しすぎるやろ!

女の子と手料理とかオジサン超嬉しいんだが!

ティア「ええ」

準備をしてくれるティア
生憎俺料理なんて作ったことないしな・・・
助かるよ・・・

数分後・・・

料理ができたようだ

・・・料理？

ルーク「お・・・おお、美味そうなおにぎりだな」

料理・・・うんコレは料理だ！

ティア「今作れるのはこれくらいしか・・・」
ルーク「いや、おにぎりも立派な料理だつて」

もぐもぐと食べる
うんうん美味しい！

ルーク「こうやって外で食うおにぎりも良いもんだな」

ティア「味付けは大丈夫？」

ルーク「ああ。美味しいよ」

それにこのロケーション！

更に女の子が作ってくれたおにぎり！

不味くなる要因なんて一つもない！

ティア「・・・良かった」

こんな時だけど、ぼのぼのしててええな・・・

ティア「さあ、食べ終わったし行きましょう」

ルーク「食うのはっや！ちゃんと良く噛んで食べたか？」

ティア「あまり食事に時間を摂らないから・・・」

ティア「つて軍人だもんな・・・」

食事の時も有事の際に動ける様にしてきたんだろうな・・・

ルーク「ちよ、ちよつと待つててくれ。すぐ平らげちまうから！」

おにぎりを口いっぱいに放り込む

ルーク「おひ！（よし！）おああふえ（お待たせ！）」

ティア「ちゃんと口の中の物を飲み込んでから話しなさい・・・」

勢い良く食い過ぎて喉に詰まりそう・・・

鼻からおにぎり出てきそう・・・

ルーキーチーグルの森

入って早々、知っている人影がいた

あれは・・・

ルーキー「おい、あれって導師イオンじゃないか!？」

魔物に囲まれたイオンがいた

ティア「危ない・・・!」

ルーキー「やべえ!」

剣を抜き、イオンの元へ駆け出そうとする

その時だった

イオンを中心に巨大な魔法陣が出現する

ほぼ同時に光の柱が魔物を掃討する

あれは・・・ダアト式譜術じゃないのか!?
だとしたら・・・!

イオンの元に駆け寄る

イオンの体は今にも倒れそうになる

ルーク「おい！大丈夫か！」

体を倒れる寸前に抱える

セーフセーフ！

これ使うとこうなっちゃうのよな・・・イオン

イオン「だ、大丈夫です。少しダアト式譜術を使いすぎただけで・・・」

イオンが立ち上がる

イオン「あなた方は、確か昨日エンゲーブにいらした・・・」

ルーク「ルークだ」

イオン「ルーク……。古代イスパニア語で『聖なる焔の光』という意味ですね。いい名前です」

ティア「私は信託の盾の騎士団、モース大詠師旗下情報部第一小隊所属、ティア・グランツ響長であります」

イオンが驚く

俺も驚く……

めちやくちや長い口上をよく嘯まずにスラスラ話せるな……

イオン「あなたがヴァンの妹ですか。噂は聞いています。お会いするの初めてですね」

どうしよう……

ここで俺なんか言った方が良いのだろうか

確か本物のルークはこの辺りで妹って聞いてすげえ驚いてたと思ったけどな……

ルーク「妹……か」

ティア「……」

ティアが俺を少しだけ見たような気がした

……そりやそうだ

……気まづいよな

まあ俺は知ってたからアレだけどき……

ティア「……ごめんなさい。秘密にしておくつもりはなかったのだけど……伝えづらくて」

ルーク「うーん……まあそうだよな」

ティアの立場からしてみたら、そりやそうだ……

その上俺も顔馴染みっていうか、師匠っていうか

ルーク「……まあ前も言ったろ。落ち着いたら話してくれればいいって。お前自身もさ……」

なんというか、フォローになっているのだろうか・・・
年頃の女の子を慰めるのって難しい・・・

ティア「・・・ありがとう」

そんな話をしている時だった

イオン「チーグルです!!」

うお!?

色違いのミュウが居る!!

黄色のチーグルだ!!

ルーク「ホントだ! 案外早く見つけたな! 追いかかけよう!」

チーグルに向かって駆け出す

イオン「ヴァンとの間で……何かあったのですか？」

ティア「そ……それは……」

イオン「いや、追求しない方がいいですかね」

ティア「すみません。私の故郷に関わることです。できることならルークやイオン様を巻き込みたくは……」

二人の方を見る

何か話してるのか？

ルーク「二人とも！見失っちゃうぞ!？」

イオン「行きましょう!」

ティア「え？あ、はい!」

二人もルークの元へ向かう

チーグルを追うも、先程のチーグルを見失ってしまった

ルーク「どこ行ったんだろうな……。見失っちゃった」

イオン 「大丈夫。この先に行けばチーグルの巣があるはずですよ」
ルーク 「お？ そうなのかな？」

ティア 「どうしてイオン様がそのことを？」

ティアの問いかけに答える

イオン 「はい・・・実はエンゲーブでの盗難事件が気になってちよつと調べていたんですよ」

それは良い事かもしれないけど、ちよつと危機感が足りてない気が・・・
せめて護衛を連れなさいや・・・

イオン 「チーグルは魔物の中でも賢くて大人しい。人間の食べ物を盗むなんて、おかしいんですよ」

ティア 「ルークの考えと同じなのですね」

イオン 「そうなんですか？」

え!?

うんうんまあまあそうそう・・・

何つつたつけ俺・・・

ストーリー進行に準ずるあまり・・・何を言ったか定かじやない

ルーク「お?おう・・・まあな」

イオン「同じ考えの方がいるとは・・・」

・・・すうー・・・

何を言ったか臆気だけど、なんかそれらしい事は言った気はする

イオン「という事は、お二人もチーグルのことを調べにいらしたんですか」
ルーク「まあ、そんな感じだよ」

そんな感じ・・・なんだけど・・・

果たしてストーリー進行に沿って行くことが正しいのか・・・

ルーク「しっかし、導師イオンを連れて行くのは流石にリスクあり過ぎるよな……」
ティア「当たり前よ！イオン様を危険な場所にお連れするなんて！」

イオン「ですが……。お願いします！僕も一緒に連れて行ってください！」
ルーク「うーん……」

……いや、寧ろ近くにいた方が守りやすいかもな
というかここで別れてもどうせ来ちやうだろうし

ルーク「……よし、分かった。一緒に行こう」

イオン「よろしいんですか？」

ティア「ちよつとルーク!!」

ティアに怒られる……

……女の子に怒られるのも良いものだな

ルーク「冷静に考えてみるよ。ここで導師を村に送ってもまたここに来ちやうだろ

？」

イオン「……はい、すみません。どうしても気になります。チーグルは我が教団の聖獣ですし」

ルーク「なら、俺たちが導師を守って進んだ方が遥かに安全だと思うぞ？」

ティア「それは……」

イオンが俺に近寄る

イオン「あ、ありがとうございます！ルーク殿は優しい方なんですな！」

ルーク「そ、そんな事ないって！それと、あのダアト式譜術は使っちゃダメだぞ？戦闘は俺たちで何とかするから」

俺の手を握り、キラキラした目で俺を見る

イオン「守って下さるんですか。感激です！ルーク殿！」

すうー……

男の子……だけどさ……

イオン可愛いなおい・・・
いやいやバカか俺

ルーク「いやいやいや良いって別に！それよか、俺の事はルークでいいよ！ルーク
『殿』なんてくすぐったいからさ！」

イオン「はい！ルーク！」

ルークと共に歩き始めるイオン

ティア「・・・もお」

ティアも二人の元に急ぐ

。。。チーグルの巢の前

入口の前にリングゴが何個か落ちている

その一つを拾うイオン

イオン「このリングゴには、エンゲープの焼印がついていますね」

ティア「やはりチーグル達が・・・それにこの木。獣の気配がするわ・・・」

イオン「チーグルは木の幹を住み処にしていますから」

入口にスタスタと歩き始めるイオン

ルーク「ちよ、イオン！危ないだろ！」

ティア「追いかけましょう！」

イオンを追う二人

チーグルの巣内部

数十匹のチーグルに囲まれているイオン

おお・・・可愛いな・・・

一匹テイクアウトよろしいでしょうか？

イオン「通して下さい」

チーグル「みゅーみゅーみゅーみゅーみゅー！」

ルーク「導師、チーグルと対話できるのか？」

イオン「チーグルは教団の始祖であるユリア・ジュエと契約し、力を貸したと聞いていますが・・・」

チラツとティアアの方を見る

ティアア「・・・」

トロンとした目でチーグルを見てる・・・

可愛い物好きの君なら、そんな反応だよな

コレで本人は隠してるつもりなのが・・・尚良し!!

チーグル族長老「……みゆみゆーみゆうみゆう」

長老が声をかけると、チーグルたちが道を開け始める

チーグル族長老「……ユリア・ジユエの縁者か？」

シャ……シャベッターー

……つて俺は驚く訳もない

ティア「チ……チーグルが、喋ったわ！」

代わりにティアが驚いてくれたな

チーグル族長老「ユリアとの契約で与えられたリングの力だ。お前たちはユリアの縁者か？」

再び問いかけてくる

イオン「はい。僕はローレイ教団の導師イオンと申します。あなたはチーグル族の長とお見受けしましたが」

チーグル族長老「いかにも」

ルーク「どうして、エンゲープから食べ物盗んだんだ」

そうそう

これは一応聞いておかないとな

チーグル族長老「なるほど。それで我らを退治に来たという訳か」

ルーク「そんな物騒な事しに来たわけじゃないさ。どうして草食のチーグル達が、わざわざ人間の食べ物を盗む必要があるのかなってさ」

長老は下を向きながら応える

チーグル族長老「・・・チーグル族を存続させるためだ」

ティア「食べ物がない訳ではなさそうね。この森には緑がたくさんあるわ」
チーグル族長老「我らの仲間が北の地で火事を起こしてしまった」

うーん……

ミュウ……の事だよな

チーグル族長老「その結果、北の一角を住み処としていた『ライガ』がこの森に移動してきたのだ……。我らを餌とするためにな」

イオン「では村の食料を奪ったのは、仲間がライガに食べられないためなんですわ」
チーグル族長老「……そうだ。定期的に食料。届けぬと、奴らは我らの仲間をさらって食らう」

イオン「ひどい……」

ルーク「……」

実際問題ライガはまだ交渉の余地を残してる辺り、まだ理性があるよな……

自分たちの住み処を燃やされたら、普通は激昂してチーグルを食い尽くしちまうだろうし……

イオン「これでは、本来の食物連鎖の形とは言えませんね」

ティア「ルーク。真相は判明したけど、あなたはその後どうしたいの？」

どうしたい・・・か・・・

元々こうなる事は知っていたんだ・・・

ルークとして立ち回るなら・・・

・・・

いや・・・俺は・・・

今は俺がルークなんだ

俺がやりたいのは・・・

ルーク「ライガと交渉しよう」

ティア「・・・！」

イオン「さすがです、ルーク。僕も同じ事を考えていました」

ルーク「とうか、そもそもライガって喋れるのか？」

イオン「僕たちでは無理ですが、チーグル族を一人連れて行って訳してもらえれ

ば・・・」

長老が近寄る

チーグル族長老「・・・では、通訳のものにわしのソーサラーリングを貸し与えよう」

そう言うと、長老はチーグルを一匹呼び始める

チーグル族長老「みゆうみゆみゆみゆみゆう」

そうすると、一匹のチーグルがでてきた

チーグル族長老「この仔共が北の地で火事を起こした我が同胞だ。これを持っていて欲しい」

そう言うと長老は、そのチーグルにソーサラーリングを渡す

ミュウ「ボクはミュウですの。よろしくお願いするですの」
ルーク・ティア「かわいい」な」

ハモってしまつた・・・

ティアの方を見ると、照れ隠しか向こう向いている・・・
ものつすげえ恥ずかしい・・・

ルーク「あ、えつと・・・よろしくな」

ミュウ「はいですの！よろしくですの！」

こうしてチーグルの巣を後にする俺たち

・・・さつとと、だ

ここからが正念場だ

これで交渉失敗したら正規ルート・・・

もし成功したら・・・

ここが本当にターニングポイントになるな

果たしてどうなるか・・・

そもそもねじ曲げるのが許されるのか・・・

チーグルの巣を出ながら、そんな事を考えていた

ミュウ「みなさん、見て下さいですの」

そう言うと、ミュウは突然火を吹いた

ルーク「うお！びっくりした」

ミュウ「どうですの。すごいですの」

ティア「今のは？」

ミュウ「ボク、炎を吐けるですの。だから通訳以外にもお役に立てるですの」

あれか！

四角ボタンを押すと出るあれか！

ミュウ「仲間に迷惑をかけた分ボク、頑張るですの」

イオン「確か、チーグル族は炎を吐ける種族でしたね」

ミュウ「はいですの！でもミュウのは特別ですの！」
ティア「特別？」

ミュウ「ミュウはまだ子供だから、ホントは炎なんて吐けないですの」

ふむふむ・・・

ミュウ「ところが！ソーサリーリングですの！これのおかげで、炎を吐けるですの！」

ほうほう・・・

ミュウ「それに幾ら炎を吐いても疲れないですの」

そう言うと、何度も炎を吐くミュウ

なんだこのテレフォンのショッピングみたいな紹介は・・・

いやいやというか！

ルーク「おいおいミュウ！分かったから炎吐くの辞めろって！燃え移っちゃまう！」

ミュウ「みゆ!?・・・ごめんなさいですの」

・・・この仔は自分がやっちゃったことしつかり自覚してるんだろうか

ティア「でも、この大きさの炎だと、あまり実戦向きとは言えないわね・・・」
ミュウ「みゆううううう・・・」

落ち込むミュウ

ティア「あ、ごめんなさいミュウ・・・」
ルーク「いや、でも何かしらにはきつと重宝するさ。戦闘だけが使い道って訳でもないし」

ミュウ「みゆ・・・!」

ルーク「とは言え火元には注意って事で、俺たちが吐いて欲しいって時に吐いてもらうってことで良いか?」

ミュウ「はいですの!わかりましたですの!」

元気になるミュウ

正直俺はこういう小動物めっちゃ好き・・・

近所に居た猫ちゃんとかめっちゃ可愛がってたしな

イオン「ルークは、本当に優しいのですね」

ルーク「な、なんだ急に！」

イオン「いえ、何でもありませんよ」

イオンが微笑む

優しい・・・のか？

オリジナルのルークは確かここでミュウに『ブタザル』っていうあだ名つけたけど、そんな事言えないし・・・

というか普通に接してるだけなのにそんな評価貰ってもな・・・

ルーク「ほら！早くライガの所に行くぞ！」

みんなを催促する

ティア「ええ」

イオン「はい」

ミュウ「はいですよ！」

歩き始める三人と一匹

さて、ここからだ

いよいよ対面って訳か・・・

ライガ・クイーンに・・・

果して、交渉なんて出来るんだろうか

出来なければ正規ルート・・・それはつまり

・・・くっそ

ティア「ルーク？」

心配気に俺に声を掛ける

おっと、いけねえ

顔に出てたか

ルーク「ん？どうした？」

ティア「心配なのね？」

その通りだよ・・・

正直胃が痛い

食ったおにぎりが出そうなくらい・・・

ルーク「・・・心配というか、交渉出来なかったらどうしようって思ってたさ」

ティア「そうだったら、戦闘は避けられないかもしれないわね」

ルーク「・・・ああ」

・・・そうなんだ

このままだと絶対に交渉は失敗する

つまりそれは・・・全く変わらないストーリー展開になる

未だに俺には正解が分からない

変わらないストーリー進行が良い事なのかが・・・

ルーク「なあティア。俺、出来れば戦いで全て解決するっていうのは避けたいんだ」

ティア「え？」

ルーク「甘い考えって事は分かってる・・・。分かってるんだ」

ティア「・・・」

ルーク「でもそれを言い訳にして、可能性のある選択肢を潰したくないんだ」

ティア「でもルーク。その可能性を信じて死んだら、元も子もないのよ？」

ルーク「分かってる。だから一つ頼みがある」

ティア「え？」

ルーク「交渉には俺とミュウの二人で行こうと思う」

足を止めティアが俺に向き直る

ティア「な！何を言ってるの!？」

その声に驚き、イオンとミュウも足を止める

イオン「どうしたのですか？」

ミュウ「みゆ？」

ルーク「いや、交渉の時だけだ。戦闘の意思はないってところを示さないと、まずライガは聞く耳を持たないだろ？」

ティア「同じ事よ！あまりにも危険すぎるわ！？問答無用で襲ってくるかもしれないのよ！？」

ルーク「・・・交渉が無理だと俺が判断したら、俺の合図で加勢して欲しい」

ティア「リスクが高すぎるわ！？それにー」

ルーク「ティア」

ティアを止める

ルーク「俺を信じてくれ」

真つ直ぐティアの目を見て言う

ティア「・・・」

何の根拠も勝算もないルークの言葉

それなのに何故なのかしら・・・

どうして信じてみる気持ちになるのだろう・・・

普段の私なら絶対に止めている彼の作戦

でも・・・それでも・・・

きつと彼なら・・・

そんな予感をさせてくれる

ルークなら・・・

・・・思いの他怒られたでござる

いやしかし、ここまでのリスクを背負う理由はある理由としては、助っ人が来ることを知っているから

それも強力な助っ人が

だが、この助っ人が来たたら恐らくライガは駆除されてしまうだからこそなんだ

戦わないっていう選択をするのは

正直な話、加勢の合図をするって言うのは殆ど嘘だハナからするつもりは無い

絶対交渉を成立させる

いや、させてみせる

ルーク「・・・」

ティア「……」

イオン「……」

ミュウ「みゆう……」

沈黙が……怖い

でも、信じて欲しいからこそだ

ティアが後ろを向く

ティア「……バカ」

ルーク「え？」

あれ？

バカって言った？

ルーク「なっ！」

ティア「分かったわ……。あなたを信じる」

ルーク「へ？」

イオン「危険な賭けですね……。大丈夫なんですか？」

そりや大丈夫な訳ない

でも、俺が弱気じゃみんな沈んじまうよな

ルーク「ああ。やってみせるさ」

ミュウ「みゆう！ボクもがんばるですの！」

どうやら俺の案を呑んでくれた……

ルーク「……ありがとな、ティア」

ティア「……」

ティアに声をかける

さて、気合い入れつか！

頬を叩き、今一度気合いを入れ直す

ルーク「絶対成功させてやる・・・！」

三人と一匹は、ライガの元へ向かった

6 気がついたらストーリー捻じ曲げてた 後編

——チーグルの森

ルーク「……」

顔が強ばってるのが自分でわかる

・ ・ ・ あんだけカッコつけてこの有様って

ティア「ルーク……？本当に大丈夫？」

それに気づいたティアが俺に声を掛ける

ルーク「あ、あったり前よ！」

イキってみせるが、正直ガクブルだ・・・

多分ライガが怖いからとか、そういうのじゃない・・・

失敗して、戦闘になるのが怖いんだ・・・

戦って解決なんて、絶対に嫌だ

そうなりたくないから、俺は・・・

ルーク「・・・悪い。俺がビビってたら話になんねえよな」

イオン「やはり、我々も傍にいた方が・・・」

ルーク「いや、最初の作戦で行くよ」

戦闘の意味はないという事をまずは見せつけないと

・・・やっべえ

・・・超絶緊張する

ティア「ルーク・・・」

不安がらせちまったな・・・

ルーク「・・・へへ。らしくなかったかな。大丈夫だ」

そうだ

もう後には引けねえ

やるつきやねえんだ

ルーク「ミユウ。危ない作戦に巻き込まれて、ごめんな」

ミユウ「いいですよ！ボクは、ボクのやれることをやるですよ！」

・・・ミユウ

なんだ、ミユウの方がよっぽど覚悟決まってるじゃねえか

その言葉でちよつとだけ足りなかった勇気が出たな

ルーク「へへ！良い根性だ！」

ミユウ「はいですよ！」

ミュウを肩に乗せ、颯爽と歩く

イオン「ルークは、お強いんですね」

ティア「そうですね……。それに彼は優しい」

イオン「はい。魔物を相手に絶対に戦わない交渉をするという固い意思……」

イオンがルークの後ろ姿を見て語る

イオン「普通なら、こんな命懸けの作戦は立案しません」

ティア「……はい」

イオン「きつとルークは、魔物の命をも尊いと思える優しい方なのでね」

ティア「……でもその優しさが、仇になるのではないかと少し不安なのです」

イオン「ふふ」

ティアを見て軽く笑うイオン

ティア「イ、イオン様？」

イオン 「大丈夫ですよ。ルークにはあなたがいるではありませんか」
ティア 「え!？」

驚くティア

ティア 「わ、私と彼はそんな・・・」

イオン 「さあ、行きましょう！」

スタスタと歩くイオン

ティア 「ま、待って下さいイオン様！」

イオンを追うティア

——ライガ・クイーンの住処

ルーク「・・・あれが・・・女王か？」

ティア「ええ、ライガは巨大な雌を中心とした集団で生きる魔物なのよ」
イオン「はい。間違いありませんね」

さーて、いよいよ本番だ

リトライなんて出来ない一発勝負

タイムリミットは、助っ人が来るまで

ルーク「それじゃ、当初の作戦通り二人は陰で隠れててくれ」

ティア「・・・無理は絶対しないでね」

イオン「・・・お気を付けて！」

ルーク「ミュウ！準備は良いか？」

ミュウ「はいですの」

ミュウを抱き抱えながらライガ・クイーンに近寄る

ルーク「ミュウ、話し掛けてみてくれ」

ミュウ「はいですの！」

ライガの前に立つ

ミュウ「みゆう、みゆうみゆうみゆみゆーみゆう・・・」

ミュウの声を聞き、ライガ・クイーンがこちらを見る

・・・足が震える・・・

ミュウに伝わってなきや良いけど

ライガ・クイーン「オオオオオオ!!」

とんでもない咆哮を食らった!

気を抜いたら吹っ飛ばされそうだ!

ルーク「ぐっ・・・!女王はなんて!?!」

ミュウ「卵が孵化するところだから・・・来るな・・・と言ってるですの」

卵か・・・

ミユウ「ボクがライガさんたちのおうちを間違つて火事にしちゃったから女王様、すごく怒つてるのです・・・」

ルーク「当然の反応かもな・・・」

卵を守るつて事は・・・凶暴性二倍説まであるな・・・

ルーク「卵の孵化を待つてたら・・・それこそ本末転倒になつちまう」

まずは・・・！

ルーク「ミユウ！女王にこの土地を立ち去ることは出来るかつて聞いてくれ！」
ミユウ「は、はいですの」

再びライガ・クイーンに語る

ミュウ「みゆ、みゆうう、みゆうみゆう・・・」
ライガ・クイーン「オオオオオオオオオオオオ!!」

さつきの倍くらいの咆哮が襲う!

ルーク「うわ!!」

倒れそうになるところを踏ん張る!

ミュウ「ボクたちを殺して、孵化した仔共の餌にすると云ってるのです・・・」
ルーク「くっそ!このままじゃ!」

・・・何も変わらねえのかよ!!

くっそ!くっそ!

考えろ!!

考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ!!

ルーク「ミュウ！俺の言葉をそのまま訳して女王に伝えてくれ！」
ミュウ「は、はいですの！」

ミュウを首の後ろに乗せる

さながら肩車と言ったところか

ルーク『女王！聞いてくれ！俺の名はルーク！』

ライガ・クイーンは俺と目を合わす

ルーク『このままじゃ誰も望んじやいない結末になっちまう！それで良いのか！』

詰め寄りながら俺を睨むライガ・クイーン

ルーク『これから産まれてくる仔共を大事に思ってるなら、ここから去ってくれ！』
ライガ・クイーン「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

凄まじい咆哮が俺たちを襲う

鼓膜が・・・破れちまう・・・

ミュウ「女王様は言ってるですよ！チーグル族によって、なくなっ住処を移り住んだ、何故我々が去らなければならない、と言ってるですよ！」

まさに正論・・・

ルーク『筋が通ってないのは重々承知なんだ！分かってる！』

畳み掛けるように話し続ける

ルーク『でもここに住み続けちまったら、遅かれ早かれ卵と一緒に駆除されちまう！
そんなのお前だつて望んじやないだろうが!!』

ライガ・クイーン「オオオオオオオ！」

ミュウ「そんなもの、返り討ちにする、と言ってるですよ！」

・ ・ ・ こんの ・ ・ ・ 獣頭が!!

ルーク 『ふっぎけんじやねえぞ！仔共が大事なんじやねえのか！』

続けるルーク

ルーク 『少しでも仔共の事を考えるなら！村の近くなんて軍人がすぐ来るような危ねえ場所じゃなくて！もつと違う森の奥の方が何倍も安全だろうが!!』

さらに畳み掛ける

ルーク 『お前が死んじまったら！残された「子供」はどうすんだ!!』
ライガ・クイーン 「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

俺に襲いかかる女王

ルーク 「うっ！」

ティア「ルーク!!」

彼に襲いかかるライガ

指示なんて待っていられない!

杖とナイフを取り出し、加勢しようとする

ルーク「来るなあああ!!!」

ルークが吼える

ティア「なっ!?!」

ルークの声に制止する

何を考えているの!?

このままでは死んでしまう!

ティア「でも・・・!?」

イオン「このままではルークが!」

ルークの言葉を思い出した

ルーク『俺を信じてくれ』

思い出したたったその一言が、彼女を思い留まらせた

そう、ルークは言った・・・

ただ、俺を信じてくれと

ティア「ルーク・・・!」

私が今出来ることは、ただ祈るしか・・・

ティア「死なないで・・・！ルーク・・・！」

右腕にライガの牙が思いつ切り食い込む

ハッキリ言おう・・・

マジで痛い！

めちやめちや痛い！！

でも違和感を感じた・・・

本当に食い殺すつもりなら、今ので殺っていた筈

それをしなかったんだ・・・

まだ、終わっちゃいないんだ！

だからティアを止めた

横目でティアが加勢しそうなのが見えたからな！

ルーク「み・・・ミュウ・・・怪我不いか？」

冷や汗が流れる中、ミュウに問いかける

ミュウ「ボ、ボクは大丈夫ですよ！でも！」

ルーク「っへへ・・・。俺は平気だ」

右腕の肉に食い込む牙

とつてもグロし・・・

ただ一筋の光明が見えた気がした

・・・正直使おうかどうか迷っていたけど、最後の手段を取るしかない

ルーク「・・・良いか、ミュウ。これから訳してもらおうのは・・・俺とミュウだけの

秘密だ・・・!いいな!」

ミュウ「みゆ・・・!?!は、はいですよ!」

大きく息を吸い、語り始める

ルーク『お前と仔共が死んだなんて「アリエッタ」が聞いたらどんな気持ちになるか位、お前にだつて分かるだろ!』

ライガ・クイーンの動きが止まる

ルーク『俺は・・・お前だけじゃない。アリエッタにだつて幸せになつて欲しいんだ』

続ける

ルーク『あの子の成長を見届けもしねえで勝手に死ぬなんて無責任だろう!』

ライガ・クイーンの力が緩まるのを感じる

ルーク『てめえの子供の成長を見届けてやる、それが！親つてもんだろぅがあ!!』

血を流し過ぎて倒れそうだ・・・

貧血気味になっっているのが自分でわかる

それでも止めるわけにはいかない

もうこれ以上・・・あの子から・・・

家族を亡くさせてはいけない・・・

ルーク『だから・・・頼む・・・』

あの子の・・・悲劇の運命を変える為に・・・

ルーク『もうあの子もとから・・・居なくならないであげてくれ・・・』

・
・
・

これ以上は・・・もう無理か・・・

言いたいことは・・・言い尽くした・・・
もうすぐ・・・助つ人も来ちまう

そうなれば打つ手はない・・・

ライガ・クイーン「ウウウ・・・」

俺の腕から牙を抜く

傷口を舐めるライガ・クイーン

・・・何だ？

ルーク「・・・え？」

ライガ・クイーン「ウウ・・・」

ルーク「ミュウ・・・女王は・・・なんて？」

ミュウに問いかける

何だ・・・何が起こってる・・・？

ミュウ「女王様が・・・土地を去る、て言ってるのですの！」

ルーク「！」

伝わった・・・

思いが・・・

ミュウ「アリエッタを、知ってるのか、と言ってるのですの」

ルーク『ああ、知ってるよ。あの子は俺の事知らないけどな・・・。桃色の髪の毛の、女の子だよな・・・』

あの子の最期を考えると・・・胸が痛い・・・

もしその運命が少しでも変わるとするなら・・・それは間違いなくここだ

ただこれは許される事なのか・・・？

・・・いや、もう悩むのはやめだ

ライガ・クイーン「ウオオオオオオオ！」

ライガ・クイーンが吠える

それは敵対ではなく、この闘争に終止符を打つ遠吠えだった

ミュウ「みゆ!？」

ミュウが反応する

ルーク「・・・ん？」

ミュウ「女王様が・・・ルークさんに、お礼を言ってるのです・・・」

ルーク「・・・お礼？」

ミュウ「はいですの・・・」

お礼・・・

なんで・・・お礼なんか・・・

住処を失ったお前達を・・・俺は追い出そうとしてるんだ・・・
なのになんで・・・お礼なんか・・・

ルーク「礼を言わなきゃいけないのは・・・俺だよ・・・」

涙が溢れた

安心からか・・・この結果だからか・・・女王の優しさからなのか・・・
多分全部なんだろうな

色んな感情がもうぐつちやぐちやだ・・・

ライガ・クイーンが卵を尾で優しく包み、去ろうとする

ルーク「女王!!」

ミュウの通訳を介さず、俺自身の言葉で伝える

伝わるかなんて分かんねえ・・・

でも誠意を見せたい・・・

ルーク「・・・ありがとう」

頭を深く下げ、お礼を言った
涙が地面に落ちる

ライガ・クイーンは俺を見た

ライガ・クイーン「ウウウ」

何かを伝えたライガ・クイーン

そうして間もなく、ライガ・クイーンは高く跳び、木から木へと跳び移っていった
・・・終わったんだ

何とか・・・

ティア「ルーク!!」

後ろからティアが向かってくる
慌てて涙を拭く

ルーク「お、おうティーーーーー」

抱きつくティア

ふお・・・フオ・・・

フオーーーーー！！！！

むね！ムネ！胸が！

ルーク「うお!?おいティア!!」

ティア「バカ!!」

怒られる俺

えー・・・

ティア「何考えてるの!?死ぬかもしれないのに!」

うう・・・はい・・・

ティア「襲われた時どうして私を呼ばなかったの!」

はい・・・

ティア「死んじゃうかと・・・思ったじゃない・・・」

涙目になっているティア

・・・あらく可愛い

なんて言ったら腕切り落とされそう

ルーク「・・・悪い」

ティア「・・・バカ!」

そう言つて俺の腕に治癒術をかけるティア

そういえばかなり痛むな・・・

もう色々あり過ぎて忘れてたわ・・・

イオン「ルーク・・・あなたという人は・・・」

ルーク「イオン・・・」

イオン「無事で良かった・・・本当に・・・」

ルーク「心配かけちまったな・・・」

・・・はあ

腰を地面におとす

疲れた・・・

戦つてもないのにこの疲労感・・・

オジサン・・・歳とつたな・・・

あ、体は17歳ですよ？

ルーク「いつてて・・・。ティア！もうちよい優しくしてくれよ」

ティア「痛いのは生きている証拠よ！黙ってなさい」
ルーク「冷血過ぎませんか？」

ティア「・・・何か言ったかしら？」

腕をグツと掴むティア

ルーク「うおおおい！腕取れちまうだろ！」

ティア「静かにしなさい！」

俺とティアがそんなやり取りをしていた時だった

ジエイド「おやおや、痴話喧嘩ですか？」

背後から歩いてくる人物がいた

強力な助っ人・・・ジエイドだった

ルーク「誰がだよ・・・」

ティア「カーティス大佐！」

本当にギリギリだったんだな・・・

ジェイドが来たら問答無用だった筈

危なかった・・・

ルーク「俺たちそういう関係じゃないって・・・」

ジェイド「冗談ですよ。それと私のことは、ジェイドとお呼び下さい。ファミリィネームの方にはあまり馴染みがないものですから。・・・それより」

・・・何だ？

ジェイド「あなた達は、ここで何を？」

すうー・・・

森林浴です、なんて言っただけ信じてもらえないだろうか

イオン「ルークが、食料庫盗難の問題を解決してくれたんです」

イオンが割り込む

ジエイド「イオン様。それはつまり？」

イオンがこれまでの事を簡潔にジエイドに説明をする

チーグルがライガの住処を燃やしてしまったこと

その為に食料庫から盗み、ライガに買いでいたこと

ミュウを介して説得をした事

そして・・・

ジエイド「・・・ライガの女王が移住の申し出を受け入れた、と」

イオン「はい。ルークが命懸けでやってくれたんです」

ジエイドが俺に詰寄る

ジェイド「魔物の言葉を、あなたは鵜呑みにしたのですか？」

ルーク「・・・ああ」

ジェイド「所詮は魔物です。戻ってこないとは限らない」

グツサグサ刺さる

ジェイド「それに移住した先で、また別に犠牲者が出るかもしれないということを予想出来なかったのですか？」

イオン「ジェイド！」

ティア「そんな・・・」

ルーク「あいつは、そんな事しないさ」

二人の言葉を覆うように応える

ジェイド「その根拠はどこに？」

ルーク「・・・感・・・かな」

ジェイド「・・・」

呆れたように俺を見て溜息をつくジエイド

やめろ

ホント根拠ないんだから

俺だって知らないストーリー展開だもの

不意に後ろを向くジエイド

ジエイド「アニス！ちよつとよろしいですか」

そう呼ぶと、宿屋であつた少女が現れた

アニス「はい、大佐♡お呼びですかあ」

アニスを呼ぶと耳元でジエイドが指示しているようだった

アニス「えと・・・わかりました。その代わりイオン様をちゃんと見張つて下さいねっ」

そう言うと、アニスはまた駆け出した
それと同時に、イオンがジェイドに近寄る

イオン「ジェイド……。責められるべきは僕です。勝手に動いてしまったんですか
ら」

ジェイド「あなたらしくありませんね。悪いことと知っていて、このような振る舞いをなさるのは」

イオン「チーグルは始祖ユリアと共にローレイ教団の礎、彼らの不始末は僕が責任を負わなくてはと……」

ジェイド「そのために能力を使いましたね？ 医者から止められていたでしょう？」

イオン「……すみません」

ジェイド「しかも民間人を巻き込んだ」

なんか可哀想になってきた

ルーク「いや、巻き込んだのは俺たちだ。だから責めないでやってくれ」

ジエイド「おや。これは失礼」

ホントこのジエイドという男は・・・

さつきの問答といい、この男だけは本当に読めない

でも嫌いじゃない・・・

ジエイド「まあ時間もありませんし、これぐらいにしておきましょうか」

イオン「親書が届いたのですね？」

ジエイド「そういうことです。さあ、とにかく森を出しましょう」

ミュウ「駄目ですの。長老に報告するですの」

ミュウに驚くジエイド

ジエイド「本当にチーグルが人間の言葉を・・・」

イオン「これがソーサラーリングの力です。それよりジエイド、一度チーグルの住処へ寄ってもらえませんか」

ジエイド「わかりました。ですが、あまり時間がないことをお忘れにならないで下さ

い
」

イオンが俺の方を向く

イオン「ルーク、本当にありがとう。全てルークのおかげです」

ルーク「お？いや、別に俺は・・・」

イオン「あと少しだけ、おつきあい下さい」

ルーク「・・・当たり前だろ？行こう」

腰を上げる俺

ティア「ルーク！痛みは？」

ルーク「大丈夫だよ。ありがとな」

ジェイド「・・・」

ジェイドが俺の傷口を見てる気がする

ルーク「ん？どうした？ジエイド」

ジエイド「・・・いえ」

ルーク「？」

・・・この男のことだ

色々頭の中で考えてんだろうな

まあそれはともかくとして、まずは乗り切った

さて、ここからどうなってくんだか

そう考えながら、チーグルの住処へ向かう

ーーーチーグルの住処

チーグル族長老「みゆうみゆうみゆうみゆうみゆう」

ミュウ「みゅーみゅみゅみゅ・・・」

ジエイド「こうして魔物たちの会話を聞いているのも、面白い絵面ですね」

ティア「……かわいい♡」

・・・焦った

今絶対可愛いつて言ったよね？

ルーク「ティアさん？」

どうやら無意識で言葉を発した模様

赤面するティア

ティア「……な、なんでもないわ」

長老が俺たちを見る

チーグル族長老「話はミュウから聞いた。ずいぶんと危険な目に遭われたようだな」

そりゃあもう・・・

右腕一本犠牲にするとこだったぜ・・・

チーグル族長老「二千年を経てなお、約束を果たしてくれたこと感謝している」
ルーク「別にそんな大昔の約束のためって訳じゃないよ」

チーグル族長老「それでも、感謝をさせてくれ。ありがとう」
ルーク「・・・ああ」

素直に感謝を受けとくか
そこを意地張る理由ないしな

チーグル族長老「しかし元とはいえば、ミュウがライガの住処を燃やしてしまったことが原因」

・・・せやな

そればかりは拭えない罪だよな・・・

まあということは・・・

チーグル族長老「そこでミュウには償いをしてもらおう」

ティア「どうするつもりですか？」

チーグル族長老「ミュウを我が一族から追放する」

・・・知ってた

イオン「それはあんまりです」

チーグル族長老「無論、永久という訳ではない。今回の件でルーク殿には返しきれぬ程の恩がある」

ふむふむ・・・

チーグル族長老「チーグルは恩を忘れぬ。ミュウは季節が一巡りするまでの間、ルーク殿にお仕えする」

ルーク「俺にか？」

チーグル族長老「ミュウはルーク殿について行くと言って聞かぬ。処遇はお任せする」

まあ知ってたよこの流れ

しかしミュウも俺について行きたいなんて酔狂だな
俺、ミュウに懐かれること何もしてないぞ？

ティア「連れて行ってあげたら？」

ルーク「うーん・・・」

イオン「チーグルはローレイ教団の聖獣です。きつとご自宅では可愛がられます
よ」

ルーク「・・・そうだなあ」

ミュウに近づくと

ルーク「本当に俺と一緒に良いのか？」

ミュウ「はいですよ！お役に立てるように頑張るですよ。よろしくですよ、ご主人様」

ミュウの頭を撫でる

モツフモフで・・・ええなおい

ルーク「ああ。よろしくな、ミュウ」

ジェイド「さあ、報告も済んだようですし森を出しましょう」

ミュウを抱き抱えながらジェイドを見る

ルーク「そうだな、行こう」

色々あったがここでもおさらばって感じだな

本当に・・・濃厚すぎた

・・・しかし今後の展開がどう変化するか、だな

ミュウの展開に変わりが無いのは予想通りだった

というかコレでミュウが来てくれなかったらビビり散らかす所だったけど

ルーク「そんなじゃ長老。またな」

長老に声をかけ、住処を後にする

——チーグルの森出口

こちらに向かつて走って走ってくる人影がある

ルーク「お？あの子は・・・」

イオン「アニスですね」

アニス「おかえりなさい♡」

そう言うと、続いてマルクト軍の兵士が取り囲む

ジェイド「ご苦労様でした、アニス。タルタロスは？」

アニス「ちゃんと森の前に来てますよう。大佐が大急ぎでつて言うから特急で頑張っちゃいました♡」

頑張っちゃったか・・・それはそれは・・・

ティア「大佐！これは？」

ティアがジェイドに問いかける

ジェイド「その二人を捕らえなさい。正体不明の第七音素を放出していたのは、彼らです」

イオン「ジェイド！二人に乱暴なことは・・・」

ジェイド「ご安心下さい。何も殺そうという訳ではありませんから。・・・二人が暴れなければ」

なんでバレたんやろな・・・

うーん・・・タタル溪谷には俺とティアと辻馬車のおっちゃんしかいなかったし・・・

まあいいや・・・もう正直今日は何も考えたくない

疲れたオブ疲れた

ルーク「ああ、別に抵抗しないさ。というかできないよ」
ティア「……」

ジエイドが微笑む

ジエイド「いい子ですね。——連行せよ」

「……まあストーリー通りって感じだな

正直タルタロスの内部を生で見れるのは嬉しすぎる

とは言いつつも……ホント疲れたよ

タルタロスに着いたら軽く仮眠させて……

タルタロスに乗り込む、というか連行される

そうなる……俺はそろそろ……

人を殺さなきゃいけないってことか……

7 　いつの間にか赤く染まった　前編

――陸上装甲艦タルタロス

ジェイド「・・・第七音素の超振動はキムラスカ・ランバルディア王国王都方面から発生」

・・・うん

ジェイド「マルクト帝国領土タタル溪谷付近にて収束しました」

・・・うんうん

ジェイド「超振動の発生源があなた方なら不正に国境を越え、侵入してきたことにな

りますね」

ルーク「不正って……でもまあ大体そんな感じだな」

……あの……仮眠……

いやこの雰囲気に乗るのは無理だな……

ジェイド「ティアが信託の盾の騎士団だと言うことは聞きました」

……で、俺の名前って流れか？

ジェイド「ではルーク。あなたのフルネームは？」

お！当たったよ！

……なんも嬉しくないがな！

しかし……これはもう誤魔化し効かないな

ルーク「ルーク・フォン・ファブレ、だよ」

イオンとアニスが驚く

ジェイド「キムラスカ王室と婚戚関係にあるあのファブレ公爵のご子息……という訳ですか」

アニス「公爵……♡素敵……♡」

……あえてアニスに目を合わせないようにする

ジェイド「しかし……何故マルクト帝国へ？」

問い掛けられる

何故って言われても……なあティア先輩？

ティア「今回の件は、私の第七音素とルークの第七音素が超振動を引き起こしただけです」

せやせや！

言つたれティア先輩！

ティア「ファブレ公爵家によるマルクトへの敵対行動ではありません」
イオン「大佐。ティアの言う通りでしょう。二人に敵意は感じません」

ジェイド「・・・まあ、そのようですね。温室育ちのようですから、世界情勢には疎いようですし」

ひつでえ！

一応知ってはいるぞ！

・・・うる覚えだけどな

ルーク「失礼だな・・・。一応ある程度は知ってるよ」
イオン「ここはむしろ、協力をお願いしませんか？」
ルーク「協力って？」

ジェイドが俺に向き直る

ジェイド「我々はマルクト帝国皇帝、ピオニー九世陛下の勅命によってキムラスカ王国へ向かっています」

ティア「まさか、宣戦布告・・・？」

ルーク「おいおいおい！穏やかじゃないな！」

アニス「逆ですよ。ルーク様あゝ戦争を止めるために私たちが動いているんです」
ジェイド「アニス。不用意に喋ってはいけませんね」

アニスを咎めるジェイド

ジェイド「これからあなた方を解放します。軍事機密に関わる場所以外は全て立ち入りを許可しましょう」

ルーク「え？」

素直に驚いた

まじかまじか！

こりや探検や!

ジェイド「まず私たちを知って下さい。その上で信じられると思えたら力を貸して欲しいのです」

うんうん

ジェイド「戦争を起こさせないために」

うんうん・・・あれ?

断る理由全然無くね?

ジェイド「どうか、よろしくお願いします」

そう言うと、ジェイドは部屋を後にした

イオン「詳しい話はルークの協力を取り付けてからになるでしょう。待っています」

そう言うと、イオンも部屋を後にする

アニス「ルーク様♡私、ルーク様と一緒に旅がしたいです♡」

急にアプローチされちゃったよ・・・

ルーク「・・・急にそんなこと言われてもな」

とりあえずアニスは一旦置いていて、だ

これはもう一択しかないよな

戦争を起こさせない為なら協力は惜しまないぞ

そんな俺の公爵子息の立場フル活用や

ルーク「まあとりあえず艦内をぶらついてみるか」

ティア「そうね。せつかくの機会だし」

ミュウ「ご主人様！探検ですよ！」

ルーク「うっし！行くか！」

仮眠は・・・諦めた！

まあまあきつとどつかで休めるだろう！

それよりタルタロス探検やろ！

アニス「ルーク様♡よかつたら私が案内します♡」

急に入ってくるやん！

アニス「あのお・・・私がいたら、邪魔・・・ですか？」

めっちゃ上目遣いで言ってくるやん！

・・・これまだ俺の中でアニスだからまだ許せるけど、現実でこんな感じのやついたらあざと過ぎてキツイわ！

ティア「そんなことない。むしろ助かるわ」

ルーク「そうだな。俺たちだと迷子になっちまう」
アニス「分かりましたあ♡さ、行きましょ♡ルーク様♡」

俺たちは部屋を後にする

扉を開けてすぐ、天井に付いている物に視線が行く

連行されてる時全然気が付かんかったな

ルーク「あれって？」

ティア「譜石ね。熱を与えて光らせているのよ。きつと照明代わりに使っているの
ね」

ルーク「譜石・・・神聖な感じがするな」

ティア「譜石は予言（スコア）を詠む時に生成される聖なる石、実際神聖なものよ」
ルーク「へえー」

素直に勉強になりますなあ

それからアニスガイドの元、色々回った

艦橋、休憩室、食堂に作戦会議で使う大部屋など・・・

いやあ・・・こういう装甲艦の内部とか・・・ロマンの塊やでえ

いやはや楽しいかな楽しいかな・・・

・・・俺だけかな・・・そんな気分なヤツ

甲板に立ち寄った際、ジェイドに会った

ジェイド「やあ、両手に花ですね、ルーク」

アニス「やーん♡大佐つたら♡」

ティア「わ、私は・・・そんな・・・」

ルーク「・・・そういうの照れるし、なんて返したらいいか分かんねえからやめろつて」

ジェイド「おやおや、これは失礼」

ティアをチラツと見る

・・・なーんで照れてるんだティア先輩！

そういう反応が一番気まずくなるんや！

もつとこう、否定しなさいや！

俺まで照れが移るだろ！

・ ・ ・ そうですね ・ ・ ・ ジェイドに聞きたいことがあったな

ルーク「なあジェイド。ちよつと聞きたいことがあったんだけどいいか？」

ジェイド「ええ、構いませんよ？」

ルーク「七年前、俺マルクト軍に誘拐されかけたらしいけど、ジェイドは何か知っているか？」

ジェイド「！」

このタイミングで聞くのもアレですがね

ジェイド「誘拐とは ・ ・ ・ 穏やかではありませんね」

ルーク「まあな。だからどうって訳じゃないけど、気になってな。何か知ってるか？」
ジェイド「 ・ ・ ・ 少なくとも私は知りません。先帝時代のことでしょうか」

ルーク「その所為なのかどうか定かじやないんだけど ・ ・ ・ ガキの頃の記憶吹っ飛んじまってな」

テイア「え!？」

ティアが驚く

ルーク「あれ？ティアに言っただけじゃなかったっけ？」

ムスツとするティア

ティア「・・・初耳よ」

すうーっ・・・

やっべ・・・

ルーク「・・・まあまあ言うタイミングもありませんでしたし・・・ごめんティア」

ジェイドが何かを考え込んでいる

ジェイド「・・・まあ色々不満はあるかもしれませんが、何とか協力を決心していた
だきたいですね」

ルーク「……ああ。なんか変な事聞いて悪いな」
ジェイド「……いえ」

甲板を後にする俺たち

その他にそこそこと探索を終え、部屋に戻る俺たち
そこにはマルクト軍兵士マルコがいた

マルコ「ジェイド大佐にお取り次ぎしますか？」

ルーク「ああ、頼むよ」

マルコ「承知致しました」

まあ悩む必要無いしな

色々話を聞いて擦り合わせないと……

程なくしてジェイドが来た

ジエイド「昨今局地的な小競り合いが頻発しています。恐らく近いうちに大規模な戦争が始まるでしょう」

小競り合い・・・そうだったのね

俺世間の情勢に疎いかもしれん・・・

ジエイド「ホド戦争が休戦してから、まだ十五年しかたっていないから」

イオン「そこでピオニー陛下は、平和条約締結を提案した親書を送ることにしたので
す」

チーグルの森で言ってた親書の事か

イオン「僕は中立の立場から使者として協力を要請されました」

なるほどな

でも一個疑問が残るよな

ルーク「それが本当なら、なんだって導師イオンが行方不明なんて情報が回ってるんだ？ヴァン師匠は導師を探しに帰国したんだぜ？」

イオン「それは、ローレライ教団の内部事情な影響しているんです」

ルーク「内部事情？」

ジェイド「ローレライ教団は、イオン様を中心とする改革的な導師派と大詠師派とで派閥抗争を繰り返しています」

イオン「モースは戦争が起きるのを望んでいるんです。僕はマルクト軍の力を借りてモースの軟禁から逃げ出してきました」

それを聞き、ティアが反論する

ティア「導師イオン！何かの間違いです。大詠師モースがそんなことを望んでいるはずがありません」

・・・うーん、モースなあ・・・

ジアビスのキャラは結構すきだけどさあ・・・

モース・・・なあ・・・

ティア「モース様は予言の成就だけを祈っておられます」

アニス「ティアさんは大詠師派なんですね。シヨックですう・・・」

ティア「わ、私は中立よ？ユリアの予言は大切だけど、イオン様の意向も大事だわ」

とりあえず話を聞いとくか・・・

なんか喋ったらボロ出そうだし

イオン「教団の実情はともかくとして、僕らは親書をキムラスカへ運ばなければなりません」

ジェイド「しかし、我々は敵国の兵士。いくら和平の使者といっても、すんなり国境を越えるのは難しい」

うんうん

ジェイド「ぐずぐずしては、大詠師派の邪魔が入ります」

ルーク「そこで、俺ってことか」

ジェイドが頷く

ジェイド「はい。あなたの力……いえ、地位が必要です」

……ますます断る理由ないな

ルーク「ああ、そういう事なら構わないな」

ジェイドが驚く

ジェイド「……よろしいのですか？」

ルーク「言いも悪いも、戦争を起こさせないよう動いてるんだろ？元々断る理由も無かったしな」

そもそも、俺は昔から戦争なるものが嫌いだからな

大体犠牲になるのはいつも無関係の一般人だ

・・・正直な話今後の展開を知ってるだけに、何とか戦争を回避出来れば良いんだけどな・・・

ルーク「何とか陛下に取りなしてみよう」

ジェイド「ありがとうございます」

一礼をするジェイド

・・・なんかとん拍子に話が進むな

まあ争う理由ないけど

ジェイド「それでは、私は仕事があるので失礼します。お二人は自由に」

ルーク「ああ」

そう言つて部屋を後にするジェイド

ルーク「ふう・・・。なんか小難しい話ばかりだったな。少し風にあたりたいな」

イオンが微笑む

イオン「そうですね。気分を変えるのもいいかもしれません・・・それとルーク」
ルーク「ん？」

イオン「ありがとうございます。協力してくれて」

やめーや

俺がと言うよりウチの王様が何とかしてくんないのだし・・・

取り次ぐのは俺だけでも

ルーク「言ってるだろ？戦争を起こさないために動いてるお前らに協力しない、なんてある訳ないだろ」

ティア「ええ。でも、あんな二つ返事で良かったの？」

ルーク「へ？」

ティア「・・・いいえ、何でもないわ。それがあなただったわね」

首を傾げる

・ ・ ・ 何が言いたいんやティアパイセン！

イオン「さあ、気分を変えて甲板に出ましようか」

ルーク「ん？ ああ」

俺達も部屋を後にする

部屋を出ると、そこにジェイドがいた

ジェイド「どうなさいました？」

ルーク「ああいや、甲板で風に当たろうか—————」

言い切る前に警報が鳴る

ティア「敵襲!？」

アニス「ルーク様っ、どうしよう!」

抱きつくアニス

むしろそつちにビックリする俺

ティア「・・・」

通信機を使うジェイド

ジェイド「艦橋!どうした!？」

兵士「前方20キロ地点上空にグリフィンの大集団です!総数は不明!約十分後に接触します!」

な・・・なんだと!

兵士「師団長、主砲一斉砲撃の許可を願います！」

ジェイド「艦長は君だ。艦のことは一任する」

兵士「了解！」

・・・まじか

いよいよよって事だよな

兵士「前方20キロに魔物の大群を確認。総員第一戦闘配備につけ！繰り返す————」

ジェイドが俺たちを見る

ジェイド「三人とも。船室に戻りなさい」

ルーク「グリフィンって言ったか？」

ティア「ええ。それも大群。単独行動をする魔物が普段と違う行動をするのは危険だわ」

ほー、そうなのか

なんて言ったら轟音と共にタルタロスが揺れる

ジェイド「どうした!？」

再び通信するジェイド

兵士「グリフィンから魔物が降下！艦体に張り付き攻撃を加えています！」

こっわ!!

兵士「機関部が・・・うわああ!？」

ジェイド「艦橋！応答せよ、艦橋!!」

ルーク「魔物多数って！」

ティア「私達も安全の確保を・・・」

そう言うと、廊下の扉が蹴り破られる

??? 「おっと、動かないでもらおうか」

身の丈以上の鎌を持つ大男が現れた

ラルゴ!?

おっほ・・・生六神将

いいっすね・・・

あ、いやそんなこと言ってる場合やないか

ルーク「なんだ!？」

俺がそういう前にジェイドは詠唱をしていた

放たれた雷魔法をいとも容易く跳ね返すラルゴ

ルーク「危ねえ!!」

ティア「!」

ティアを壁に追いやり、自分の体を盾にする

・・・ほうほう、これが噂の壁ドン・・・

・・・・いやホントふざけてる場合じゃないな

ラルゴ「・・・さすがだな。だがここから先は大人しくしてもらおうか」

いつの間にか俺の首元に大鎌の刃が近づく

咄嗟にティアをジエイドの方に飛ばす

ティア「ルーク！」

ラルゴ「マルクト帝国軍第三師団師団長ジエイド・カーティス大佐。いや、死霊使い
(ネクロマンサー)ジエイド」

その通り名に驚くティア

ティア「・・・死霊使いジエイド！」

ラルゴに近づくとジエイド

ジエイド「これはこれは。私もずいぶんと有名になったものですね」
ラルゴ「戦乱のたびに骸を漁るお前の噂、世界に遍く轟いているようだな」

・・・ヒエツ

それだけ聞いたらただのヤベえ人や

ジエイド「あなたほどではありませんよ。信託の盾の騎士団六神将『黒獅子ラルゴ』」

ラルゴ「フ・・・。いずれ手合わせをしたいと思っていたが、残念ながら今はイオン様を貰い受けるのが先だ」

ジエイド「イオン様を渡す訳にはいきませんね」

ティアがナイフを取り出そうとする

ラルゴ「おっと！この坊主の首を飛ばされなくなかったら動くなよ」

ティア「く・・・」

いやほんとごめんね・・・
カッコ悪すぎてやばいよ俺

ラルゴ「死霊使いジエイド。おまえを自由にすると色々面倒なのでな」
ジエイド「あなた一人で私を殺せるとでも？」

本当の強者しか言えんセリフや

ラルゴ「おまえの譜術を封じればな」

そう言うラルゴはジエイドに何かを投げた

・・・あ！やべ！

ルーク「封印術（アンチフォンスロット）か!!」

ラルゴ「導師の譜術を封じるために持ってきたが、こんなところで使う羽目になるとはな」

ジエイド「・・・ぐう・・・っ」

切りかかるラルゴを寸前で躲すジエイド
ラルゴの頭上に見覚えのあるやつが・・・
あの天井についてるやつって・・・

ルーク「ミユウ！天井に向けてアレを吹け!!」
ミユウ「は、はいですの」

そう言うとミユウは天井についた譜石に向けて火を吹く
その瞬間に目もくらむ閃光を発する

ジエイド「やりますねルーク！アニス！イオン様を！」
アニス「はいっ！」

アニスが走り出す

ジエイド「落ち合う場所はわかりますね！」

アニス「大丈夫っ！」

ラルゴ「行かせるか！」

その瞬間、ティアの譜歌に怯むラルゴ

隙をつくったラルゴをジェイドが槍で貫く

・・・俺の目の前で

ルーク「！」

目の前で刺された人間を見たのは初めてだった

・・・ハッキリ言ってトラウマになりそうだ

鮮血が飛び散る

ジェイド「イオン様はアニスに任せて我々は艦橋を奪還しましょう」

ティア「でも大佐は封印術で譜術を封じられたんじや・・・」

ジェイド「ええ。これを完全に解くには数ヶ月以上かかるでしょう」

いつもの調子で話続ける二人

ジエイド「でもあなたの譜歌とルークの剣術があればタルタロス奪還も可能です」
ティア「わかりました。行きましよう、ルーク」

目の前の光景に頭の理解が追いつかない・・・

ティア「ルーク！」

肩を叩かれ、我に返る

ルーク「あ、ああ・・・悪い」

覚悟はしていたんだが・・・甘かったな
ゲームとは違う・・・

当たり前の事だ・・・分かってる・・・
それでも震えている自分がある

劍を抜くのが怖い・・・

いや、ダメだ

ここで震えてたら足を引っ張っちまう

折れそうになる自分を鼓舞しつつみんなの後を追う

8 8
いつの間にか赤く染まっていた
後編

「……タルタロス甲板

ルーク「……」

ティア「ルーク？」

声をかけられる

む、顔にまた出てたか？

ルーク「お、おう。どうした？」

ティア「大丈夫？」

完全に心配かけられてるな……

いやまあ、さっきの出来事引きずってるのは事実だからな

ルーク「ラルゴってやつのがな・・・死んじやったのかな、てよ・・・」

ストーリー的には生きてるはずだけど・・・変換の影響が出てるとしたら・・・有り得なくはないからな・・・

ジェイド「殺すつもりで攻撃をしましたけどねえ。まだ生きてると、少々厄介ですよ」

そんなあつさりと・・・

ルーク「・・・」

ジェイド「下手な同情は自分の寿命を縮めますよ？」

ルーク「分かってるさ・・・切り替えねえと」

自分の頬を叩く

でも簡単には切り替えられねえよ・・・

ティア「無理してはダメよ？」

ルーク「ああ、ありがとう」

ティア先輩・・・優しいつすな・・・

ティア「それと大佐、封印術の方は、その・・・大丈夫ですか？」

封印術について気にかけるティア

ラルゴにやられたやつだな

ジェイド「ええ。まあマシな動きくらいはできると思います」

ルーク「結構影響出てるか？」

ジェイド「そうですね。今の段階では下級譜術程度しか扱えないですね」

それでも譜術を使えることに驚きよ

そもそも食らったことがないだけにどこまで辛いやら・・・

ジェイド「なのでお二人の活躍に期待してますよ？」

ほくそ笑むジェイド

ティアはともかく俺に期待するのやめーや

頑張るけどさ・・・

ルーク「・・・おう」

腹は括るさ・・・

この現状をスルーは出来ないからな

ティア「わかりました。全力を尽くします」

敵の奇襲を警戒しつつ移動する

ルーク「どうやって艦橋に潜入する？」

ジエイド「通常ルートで直行するほどおろかなことはしませんよ」

ティア「罨にかかりに行くようなものですからね」

そりやそうだよな

ジエイド「ここのちようど上にあたるアーチ状の甲板から艦橋へ行くことができますから、そちらのルートで進みましょう」

ルーク「わかった。それで行こう」

梯子を登り、アーチ状の甲板を歩く

いやこっわ!!

ルーク「ティア、足元気をつけろよ？」

ティア「ええ。大丈夫よ」

何となしにティアを氣遣う

ジェイド「中々紳士的ではないですか」

なーんでこの人はすぐ茶化すんですかねー

ジェイド「私にも優しい言葉をかけて欲しいものですね」

ルーク「軍人が何言ってるんだ」

ジェイド「それはティアも同じでは？」

おっと正論パンチやめーや

ルーク「ティアは軍人でも女の子だろ？」

ティア「！」

ジェイド「なるほど、さすが公爵子息様ですねぇ」

ルーク「……今の話に子息云々関係ないだろ」

何とも緊張感が……

ティア「二人とも、お喋りは良いから警戒をして！」

釘を刺すティア

ルーク「ごめん……」

ジェイド「これは失礼しました。先を急ぎましょう」

そんな話していると扉の前に兵士がいるのを確認した
あの装備……神託の盾の騎士団か

ジェイド「ティア、任せました」

ティア「はい」

そういうと、ティアが譜歌を歌う程なくして兵士が倒れる

ルーク「見事な寝っぷりだな」

ミュウ「ティアさん、すごいですよ！」

ジェイド「タルタロスを取り返しませう。ティア、手伝って下さい」
ティア「はい」

そう言うと二人は艦内に行く

えー！俺は!?

ルーク「俺はどうする？」

ティア「見張りをお願い」

ルーク「・・・了解」

・・・なんか戦力外通告受けてるみたいで悲しい
と言うか一人って超心配何だが・・・

ルーク「しかし、あの譜歌一つで何で寝ちやうんかね」

ミユウ「ティアさんの譜歌は第七音素ですよ」

ルーク「うん」

・・・え!?

解説無いの!?

ルーク「何かすごい解説してくれるのかなって期待しちゃったじゃねえか」

ミユウの耳を手でポンポンしながら話す

ミユウ「ご・・・ごめんなさいですよ!」

そんな話をしている時だった

兵士の腕が動いた気がした

ルーク「ミュ・・・ミュウ！下がってろ！」

剣に手をのばす

すると兵士が起き上がり、剣を振り下ろしてきた

ルーク「うお!？」

寸前で何とか躲す

ミュウ「ご、ご主人様！」

ルーク「くっそ！起きやがった！」

当たり前と言えば当たり前か

隣でこんだけ話してたんだからな・・・

兵士「し、死ね！」

殺意を持った言葉

ただの暴言ではない

明確な殺意がある言葉だった

ルーク「く、来るなっ！」

剣を抜き、切っ先を向ける

他がその手は震える

兵士「うおおお!!」

雄叫びと共に切りかかる兵士

剣でそれを受け止め、鏑迫り合いになる

ルーク「やめろ!!死んじまうかもしれねえんだぞ!!」

兵士「黙れえ!!」

容赦なく襲いかかる兵士

ルーク「やめろつつつてんだろ!!」

無我夢中に剣を防ぐ

少しでも気を抜けば殺される

怖い

怖い

怖い

怖い

怖い

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

殺される殺される殺される殺される殺される

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない

足が纏れ、倒れる俺

ルーク「や・・・やめろおおお!!!」

劍を突き出すと感触があつた

それは人を刺す感触

普通の生活ではまず経験をしないう不快な感触
肉を貫く感触だつた

兵士「ふ……」

吐血する兵士

さつきまで動いていた兵士が徐々に鈍くなる
後ろに倒れ、動かなくなった

ルーク「……お、おい」

兵士に近寄る

ルーク「おい！ しっかりしろ！」

兵士をに声をかける

ルーク「おい・・・」

生きている希望がないのはわかってた

自分の両手が真つ赤に染まっていた

ああ・・・覚悟なんて口ではどうとでも言えるな

なんにも足りなかった

俺は

人殺しだ

ティア「な、何が起きたの！」

騒ぎを聞きつけてティアが走ってきた

ジェイド「まずい・・・。今の騒ぎで譜歌の効果が切れ始めました」

茫然自失とし、周りが見えない

剣に付着した血を見て更に実感する

俺は・・・

ルーク「俺が・・・殺した・・・」

??? 「人を殺すところが怖いなら、剣なんて棄てちまいな。この出来損ないが！」

誰かが叫ぶ

だが耳に入ってこない

すると頭上から氷の譜術が襲う

ティア「危ない！」

ティアが俺を突き飛ばす

直撃は間逃れたが少し被弾する

ジエイドは間一髪に躲すが・・・

??? 「さすがは死霊使い殿。しぶとくていらっしやる」
ジエイド「・・・」

兵士がティアと俺に剣を突きつける

兵士「隊長、こいつらはいかがしますか」
??? 「殺せ」

その一言に近くにいた女性が声をあげる

??? 「アツシュ。閣下のご命令を忘れたか？それとも我を通すつもりか？」

舌打ちをするアツシュ

アツシュ「捕らえてどこかの船室にでも閉じ込めておけ！」

そう言つてアツシユがその場を後にする

あれ・・・

俺・・・殺されたのか？

わかんねえ・・・

なんもわかんねえ・・・

俺・・・何してるんだっけ・・・

何したんだっけ・・・

何がしたいんだっけ・・・

『ルーク・・・我が声に・・・！ルーク・・・！』

また・・・幻聴か・・・？

やめてくれ……

ティア「ルーク！」

ティアの声に驚き、起き上がる

ルーク「……ティア」

ティア「……よかった。うなされていたから」

うなされてた……？

ああ……

ルーク「……ここって？」

ジェイド「タルタロスの船室です」

ルーク「そうか……」

正直言うと今の状況がどうだろうとどうでもよかった

それよりも何よりも・・・

ルーク「・・・つう！」

頭を抱える

人を殺したという現実が受け入れられない

ジエイド「さて。そろそろここを脱出して、イオン様を助け出さなければ」

ティア「イオン様はどこかに連れて行かれたようでしたけど・・・」

ジエイド「神託の盾の騎士団たちの話を漏れ聞くと、タルタロスへ戻ってくるようです。そこを待ち伏せて救出しましょう」

当たり前のように話が進む

ルーク「・・・戦うのか？」

ティア「避けては通れないわね」

ルーク「・・・人が死ぬかもしれないのか？」

ティア「・・・それも仕方ないわ」

この時俺は初めてティアに恐怖心を抱いた

人が死ぬかもしれないという現実を仕方ないの一言で済ませてしまうティアに

ティア「殺らなければ殺られるもの」

ルーク「そんな簡単に・・・！」

ジェイド「そうですね。人の命は大切なものです」

ジェイドが、割って入る

ジェイド「でもこのまま大人しくしていれば、戦争が始まってより多くの人々が死ぬんですよ」

ティア「今はここが私たちの戦場よ。戦場に正義も悪もないわ。生か死か、ただそれだけ」

元の世界が如何に平和だったか思い知らされる

そうだった・・・

彼女らはそうやって幾度の死線を乗り越えてきたんだ

ルーク「・・・お前らは、そんな危険な目に何度もあつてきたんだよな」

二人に語る

ルーク「俺、そんな環境で生活してなかった。だから考えが甘かったんだよな・・・。盗賊に魔物、そんなのがいくらでもいる・・・」

ティア「・・・ええ。戦える力のあるものは子供でも戦うことがあるわ。そうしなければ生きていけないから」

立ち上がり、二人に向き直る

ルーク「二人とも・・・ごめん。俺・・・足引つ張つてばかりだな」

頭を下げる

「ジエイド……人を殺すことを馴れる、とは言いません。ですが、忘れないでください」

ジエイドを見る

「ジエイド「生きたいと思うのであれば、あなた自身の力を振るいなさい」

「ルーク「俺の……力……」

「ジエイド「もししなければ、あなたもあなたの周りも何も助けられないのですから」

「何故だろうか……」

「その言葉が俺の胸に刻まれたような気がした

「そうか……」

「躊躇ったら、周りが死んでしまう

「……当たり前的事实だ

「ルーク「……ありがとう、ジエイド」

ジエイド「さて、時間が惜しいです。動きましょう」
ティア「はい」

??? 「非常昇降口を開け！」

兵士「了解」

女性がそう言うのとハッチが開き、階段が現れる
扉を兵士が開く

ルーク「ミュウ！」

ミュウ「はいですの！」

ミュウを抱えてファイアを放つ

兵士「うわああ!!」

それに驚き階段を転げ落ちる

うーん、これはこれは・・・

見事な落ちっぷりつすな

それに気づく女性

・・・ん?

あの人・・・え!?

全然視界に入らなかつたけど・・・

そう思っているうちにジェイドが飛び出し、女性に向け槍を投擲する

それを避けるがそれを読んだ上で槍を突き付けるジェイド

??? 「さすがジェイド・カーティス。譜術を封じても侮れないな」

ジェイド 「お褒め頂いて光栄ですね。さあ、武器を棄てなさい」

そう言うとな性は銃を棄てた

ふお・・・ふお・・・フオーーーーーー!!!

リグレットじゃないの!?

もう全然気付かなかったよ!

いやそれどころじゃなかったんだけどな俺・・・

ジエイド「ティア! 譜歌を!」

リグレット「ティア・・・? ティア・グランツか・・・!」

ティアの方を見るリグレット

ティア「リグレット教官!」

そう叫ぶティアだが、背後にライガが現れる

チーグルの森にいたライガ・クイーンよりも小型のライガ

ルーク「後ろだ!! ティア!!」

俺の声に気づき、魔物の攻撃を避けるティア

それと同時にジエイドの槍を振り払い、銃を拾うリグレット

牽制で数発撃ち込むリグレット

リグレットの背後にはイオンがいた

ミュウ「ご主人様、囲まれたですの・・・」

ルーク「くっそ・・・」

兵士に剣を突きつけられる俺

ヒエツ・・・

リグレット「アリエツタ！タルタロスはどうなった？」

アリエツタ「・・・」

え!?

アリエツタ!?

ルーク「色々マジかよ・・・」

ミュウ「ご主人様、あの子がアリエッタですの？」

あ、いかん

それは本当に内緒の話のやつ!!

ルーク「・・・ああ」

アリエッタ「・・・気の所為か知らんけど俺を見てる気がする
いや・・・あの・・・初対面です・・・」

リグレット「聞いているの？アリエッタ！」

アリエッタ「・・・制御不能のまま。このコが隔壁、引き裂いてくれてここまでこれ
た・・・」

リグレット「よくやったわ。彼らを拘束して・・・」

そう言った瞬間だった

上方から誰かが落ちてくる

リグレット目掛けて落ちる人影

そのままリグレットを蹴り上げる

リグレット「つぐ！」

その隙にイオンを救出する

起き上がりながら銃を撃つリグレット

それを弾く、金髪クールガイ……

ガイ「ガイ様、華麗に参上」

ルーク「華麗過ぎるってガイ！」

つい声が出る俺

アリエツタ「きやつ！」

隙をつき、ジェイドがアリエッタに槍を突き付ける

リグレット「アリエッタ！」

ジェイド「さあ、もう一度武器を棄ててタルタロスの中へ戻ってもらいましょうか」

そう言うと、素直に従うリグレット

うーん、とつてもお綺麗ですな・・・リグレット・・・

・・・やっぱ俺ってジアビス好きなんだな

こんな時でも脳内お花畑よ・・・

ジェイド「さあ、次はあなたです。魔物を連れてタルタロスへ」

アリエッタ「・・・イオン様・・・。あの・・・あの・・・」

イオン「言うことを聞いてください、アリエッタ」

物悲しげにイオンを見て、それに従うアリエッタ

あと気のせいかな？俺を見た気がした

「おいおい俺自意識過剰になってんのかな・・・」

ジェイド「しばらくは全ての昇降口が開かない筈です」
ルーク「良いタイミングに来てくれて助かったよ、ガイ！」

ガイに駆け寄り、話す

ガイ「やー、探したぜえ。こんな所にいやがるとはなー」

ジェイド「ところでイオン様。アニスはどうしました」

イオン「敵に奪われた親書を取り返そうとして、魔物に船窓から吹き飛ばされて・・・」
ルーク「え!?!それ無事なのか!?!」

イオン「ただ遺体が見つからないと話しているのを聞いたので、無事でいてくれると・・・」

ジエイド「それならセントビナーへ向かいましょう。アニスとの合流先です」

セントビナーか・・・どんなところかちよつとうる覚えなんだよな・・・

ルーク「わかった。そこに向かおう」

ガイ「そちらさんの部下は？まだこの陸艦に残ってるんだろ？」

それに対し、首を振るジエイド

ジエイド「生き残りがいるとは思えません。証人を残しては、ローレイ教団とマルクトの間で紛争になりますから」

ルーク「・・・何人、乗ってたんだ？」

ジエイド「今回の任務は極秘でしたから、常時の半分――百四十名程ですね」
ガイ「百人以上が殺されたってことか・・・」

・・・マジかよ

ティア「行きましょう。私たちが捕まったら、もつとたくさんの方が戦争で亡くなるんだから……」

ルーク「……ああ」

俺たちは歩き始めた

……でも……ちよつとだけ……

俺は後ろを向く

ティア「……ルーク？」

手を合わせ、祈った

せて、安らかに眠って欲しいと願って

ティア「……」

ルーク「ごめん、今行くよ」

四人の元へ急ぐ

死人を出したくない

当たり前だが、俺はそう願ってる

それを許してくれないのが運命だったりする

・・・でもそれを言い訳にしたくない

助けられるのであれば助けたい・・・

・・・それは六神将も例外じゃない

・・・六神将・・・か・・・

ルーク「・・・何とか助けられねえのかな」

ガイ「ん？どうしたルーク」

フオー!!

声に出る癖ホント直さないと・・・!

ルーク「な、何でもないって!急ごう!」

ガイ「?」

俺の中での当面の目標はなんとなしだが決まった
やれるかどうかはわっかんねえ・・・
・・・でも可能性はゼロじゃない
やってみるか・・・

六神将全員生存ルートってやつを・・・

9 いつの間にか守りたいと思つてた

――

タルタルの一件で二つ明確になったことがあつた

まず、俺が何かしらの介入或いはストーリーとは違う事をしなかつた場合ジアビスと同じ展開になる事

ストーリーに沿つて行くのは一番安全なのかもしれないが・・・それは俺がやりたい事とは反してしまふ

それとこれが一番の問題

自分の考え方の甘さ・・・

いくら今回混乱していたとはいえ、多数の犠牲者が出てしまった・・・

完全に自分への甘さが引き起こしたものだつた・・・

あやふやではあるが、ストーリーの展開は覚えてる

そう考えると、数百人という犠牲者は俺が殺してしまったようなものだ・・・

・・・重い

余りにも重過ぎる・・・

いくら思い入れのない人物とは言え、今のこの世界が俺にとつての現実なんだ
さつきまで当たり前に生きていた人達が死んでしまった・・・

・・・きつと心のどこかで他人事のような感覚でいたのかもしれない

ルーク「・・・」

・・・反省しなければならぬ

浮かれていた自分の愚かさを

ライガ・クイーンの一件以来、流れに身を任せていたのは事実

・・・色々動く必要がある

六神将全員生存もそうだが、まず直近でヤバいイベントがある・・・

・・・アクゼリユスだ

ここは本当に回避しないとヤバい

俺自身が無かしたら対策をしないと取り返しがつかなくなる・・・

現に今がそうだ・・・

ようやく現実味が出てきた・・・

俺は・・・

ルーク「・・・ホント、無力だよな」

ティア「ルーク？」

隣を歩いていたティアに聞かれる

・・・もうこの癬治らない気がしてきた

つい出ちやうんだもん・・・

ルーク「・・・いや、タルタロスの兵士達・・・守れなかったなって」

ティア「ええ・・・。でも、あなたが悪い訳では無いわ」

違うんだ・・・ティア

俺のせいなんだ・・・

俺が何かしらの対策をしていればこんな事には・・・

ガイ「なんだか色々大変だったみたいだな。ルーク。」

ガイに話し掛けられる

ルーク「ああ、ホント色々あったよ」

ガイ「はっはっは。屋敷を出てから大冒険！つてか？」

・・・すまんガイ

今そんなテンションじゃないんだわ・・・

ルーク「全然笑い事じゃないってば」

ガイ「まあまあ。事件はだいたい解決したんだろ？じきにバチカルに帰れるさ」

ティア「ええ。ちゃんと送り届けるつもりよ」

ルーク「ああ、ありがとな」

ガイ「・・・」

「ガイが何か考え込んでいる

ガイ「随分しおらしくなったなルーク」
ルーク「え？」

なんやなんやなんや

ガイ「てつきり我儘放題で迷惑かけてるんじゃないかなって思ってたさ」

最早諦めていたルークロールプレイ

なんなら忘れていたルークロールプレイ

すうー・・・

ヤバイ

ルーク「ま・・・まあ、我儘言ってたってしょうがねえしな・・・ははは・・・」

もう言い訳の言葉も出ん・・・

ガイ「そうか。いつの間にか成長しちまって」
ルーク「ははは・・・」

乾いた笑いしか出ん・・・

ここに居るルークがパチモンだとバレたら俺どうなっちまうんや・・・

そもそもこの先の展開を知っている、なんてカミングアウトしたらどうなっちまうのか・・・

そんな事を考えていた時だった

ドサツ

誰かが倒れたような音がした

振り返るとイオンが倒れていた

ルーク「お、おい！大丈夫か!？」

ジェイド「イオン様。タルタロスでダアト式譜術を使いましたね？」

イオン「すみません。僕の体はダアト式譜術を使うようにはできていなくて・・・」

使うようにできていない・・・か・・・

イオン「ずいぶん時間もたっているし、回復したと思ったんですけど」

ルーク「少し休憩にしよう。このまま焦って行っても導師が辛いだけだしな」

ジェイド「賛成ですね。このままでは、イオン様の寿命を縮めかねない」

一先ず休憩だ

俺自身も疲れたしな・・・

全員一致で休憩をする事にした

ガイ「・・・戦争を回避するための使者って訳か」

「ガイにジェイド達からの提案の件を話した」

ガイ「でもなんだってモースは戦争を起こしたがつてゐるんだ？」

イオン「それはローレライ教団の機密事項に属します。お話できません」

ジェイド「理由はどうあれ、戦争を回避すべきです。モースに邪魔はさせません」

ガイ「ルークもえらくややこしいことに巻き込まれたなあ・・・」

ルーク「事情が事情だしな。嫌がつてられないだろ。それと・・・」

モースの件だ

モースが戦争を起こそうとしてゐる理由ってなんだつたつげな・・・

確か・・・

ルーク「なあティア。モースつて予言重視の人間なんだよな？」

ティア「ええそうね」

ルーク「じゃあその予言に戦争について詠まれてたんじやないのか？」

イオン「!!」

いや確かね・・・そんな感じだったと思ったんだよ

ティア「そんなまさか!」

イオン「・・・」

ルーク「だつてそうだろ。モースがそこまで戦争を起こしたいなんてそれしかなかったか?」

・・・え?

何この空気

この言つちやいけないみたいな感じは

イオン「・・・すみません、お答えできません」

ルーク「・・・まあ機密事項なんだろ?それ以上の詮索はしないよ」
イオン「すみません・・・」

ちよつとこの空気感耐えられん

でもそこまで隠す必要あるのかな

中立と言っておきながらそこを隠しちゃうのか……
うーん……

ちよつとした沈黙が流れる

その沈黙を破ったのはイオンだった

イオン「ところであなたは……」

ガイの方を向くイオン

ガイ「ああ、そういや自己紹介がまだだっけな。俺はガイ。ファブレ公爵のところで
お世話になってる使用人だ」

イオンとジエイドが近づき、握手をする

それに続きティアもガイに近く

ガイ「……うっ」

ティアから飛び退くガイ

ティア「・・・何？」

ガイ「・・・ひっ」

つい笑いそうになる

いやいや笑ってはいけない！

ガイの事情を考えると笑える様な話では無いのだ！

・・・しかし

この光景は笑いそうになる！

ルーク「あー・・・悪いティア。ガイって女性恐怖症なんだ」

ジェイド「なるほど。これは重度のようですね」

ガイ「わ、悪い・・・。キミがどうって訳じゃなくて・・・その・・・」

人大体五人分の間隔をあけるガイ

ティア「私のことは女だと思わなくていいわ」

・・・無茶すぎないか？

そう言つて近づくとティア

それに対して飛び退くガイ

うーん・・・

ルーク「な、なあティア・・・。その辺にしてやれつて・・・」

ティア「・・・わかった。不用意にあなたに近づかないようにする。それでいいわね？」

ガイ「すまない・・・」

・・・明らかにキャラ的に逆なんだけどなガイ

ジェイド「ファブレ公爵家の使用人なら、キムラスカ人ですね。ルークを探しに来たのですか？」

ガイ「ああ。旦那様から命じられてな。マルクトの領土に消えてつたのはわかった

から俺は陸づたいにケセドニアから。グランツ閣下は海を渡ってカイツールから搜索してんだ」

ルーク「そうか・・・大事になっちまったな」

ティア「・・・兄さん」

ガイ「大事だろそりや・・・。え、兄さんって・・・」

そう言った直後だった

鎧が擦れるような足音がこちらに向かつてくる音がする

ジェイド「やれやれ。ゆっくり話している暇はなくなつたようですよ」

そう言つて槍を構えるジェイド

ルーク「・・・兵士」

ティア「ルーク！あなたは下がって！あなたじゃ人は斬れないでしょう！」

兵士「逃がすか！」

戦闘が始まってしまった

兵士「うおおおお！」

雄叫びと共に斬りかかる兵士

ガイ「甘いな！」

それを防ぎ、カウンターを入れるガイ

鮮血と共に倒れ込む兵士

兵士「うらああああ！」

俺にも襲いかかる兵士

ルーク「うわ!!」

辛うじて剣で防ぐ

・・・ダメだ

どうしても斬る勇気が出ない

人の命を奪う勇気が・・・

ガイ「ルーク！」

空かさずガイが俺の援護にまわろうとする

ジエイド「炸裂する力よ・・・エナジーブラスト！」

兵士「うわああ！」

術で吹き飛ばされる兵士

空かさずガイが止めを刺す

ティア「深淵へと誘う旋律・・・トウエ　レイ　ズエ　クロア　リョ　トウエ　ズエ」
ナイトメアを発動するティア

譜歌を聞き、膝を着く兵士

ルーク「・・・こそ」

自分の無力さを痛感する

何も出来なかつた

譜歌により身動きが取れない兵士

ここで一線を越えなければ俺は二度と戦えない・・・

わかつてる・・・それでも・・・

ジェイド「ルーク、やれますか？」

ルーク「・・・うっ!!」

ジェイドの問い掛けに答える余裕もなく、目を瞑り剣を振りかざす

カンッ!!

目を瞑りながら振るつた剣は怯んでいる兵士にいと容易く弾き返されてしまう
その拍子に剣を飛ばされる

ガイ「ボーツとすんな、ルーク！」
ルーク「はっ！」

気付いた時には兵士は剣を今にも振り抜くところだった

ティア「危ないっ!!」

俺を庇い盾になるティア

その斬撃はティアの左肩をとらえた

ティアの血が俺の顔に付着する

ルーク「ティア!!」

なんだ・・・これ・・・

何してんだ・・・俺・・・

俺・・・おれ・・・

ジェイドの言葉を思い出した

タルタロスで言ったジェイドの言葉を

ジェイド『生きたいと思うのであれば、あなた自身の力を振るいなさい』

・・・そうだ

ジェイド『そうしなければ、あなたもあなたの周りも何も助けられないのですから』

・・・そうだった

そうしなければ、誰も救えない

救いたいなら・・・俺自身が・・・

甘えを捨てなきゃいけないんだ！

ルーク「てええめえええ!!!」

兵士の腹部を蹴り、後ろに飛ばす

兵士「ぐっ!!」

あまりの勢いに剣を落とす兵士
その剣を空かさず取り、斬り付ける

兵士「ぐあっ！」

完全に隙が出来た胴を剣で捉える

ルーク「うおおお!!」

兵士を貫いた

鮮血を噴き出す兵士

胴の真ん中を捉えた剣は、致命傷だ

兵士「ば・・・ばか・・・な」

ルーク「……悪いな。俺は生きたいんだ……だからー」

力が抜けていく兵士に語る

ルーク「手段を選んじやいられないんだ！」

倒れる兵士

ルーク「……ティア！」

ティアに駆け寄る

ガイやジエイド達も駆け寄る

ティアを抱き起こす

ルーク「ティア……俺……」

ティア「……ばか……」

ジエイド「……幸い傷は浅い。今日はここで野営をしましょう」

ガイ「ああ……。賛成だ」

俺たちは焚き火をし、休息をとっていた

今日の事……。これからの事……

色々あり過ぎて頭が割れそうだ……

ルーク「……。はあ」

ため息をつく

無力な自分を呪う

ゲームじゃコントローラー握ってボタンを押すだけの戦闘

それが実際じゃこうなんだな……

血は出る

人は死ぬ

痛い

怖い

・・・当たり前か

皆と距離を置いて腰を下ろしていた俺にイオンが近づく

イオン「ルーク・・・大丈夫ですか？」

ルーク「ん？・・・ああ」

歯切れの悪い返事をする

イオン「ジェイドやティアの話は極端なものです。彼らは戦うことが仕事ですから」

ルーク「・・・うん」

イオン「あなたは民間人ですから、戸惑ったり悩むのも仕方のないことだと思います」
ルーク「・・・ああ。でも悩んでばかりじゃられないだろ・・・。現にティアは俺

のせいで怪我しちまったんだ・・・」

イオン「……」

ルーク「もつとしっかりしなくちやいけねえ……。震えてばっかりじゃ誰も守れな
いからな……」

自分に言い聞かせるようにイオンに語る

イオン「ルークは、本当に強いですね」

ルーク「いや、むしろ逆なんだよ……。俺は弱いし臆病だ……」

イオン「いいえルーク、あなたは強いですよ」

ルーク「？」

イオンに目を合わせる

イオン「力や技だけが強さではありませんよ。僕の言うルークの強さは、心です」

ルーク「……心？」

イオン「はい。誰かを守る為に動けるあなたは、強い」

ルーク「……」

イオン「その原動力はあなたの心です。心から守りたいと思えたからあなたは戦えたんですよ」

唇を噛み、涙を堪える

イオン「大丈夫です。あなたを責める者には居ません」

震える俺の肩に手を置き、そう語るイオン

ルーク「・・・やめろつて。泣いちゃうだろ」

イオン「ふふ・・・」

イオンと共にジェイドたちのいる焚き火の方に向かう

ジェイド「思い詰めた顔をしていますね、ルーク」

ルーク「数分前よりはマシになった顔だよ、これでもな」

さつきはとてもじゃないが、こんな風に返答も出来ない心理状態だったからな
イオンのお陰で何とか持ち直したけど

ジェイド「……やはり、人を殺すのが怖いですか？」

ルーク「……ああ。今も震えてるよ」

実際体験もしたくない出来事だしな……

ルーク「でも、ジェイドに言われた言葉で踏ん切りがついた気がしたんだ」

ジェイド「わたしの？」

ルーク「俺自身が力を振るわなきゃ、誰も守れない……ってさ」

ジェイド「……」

だからこそ実際こんなことが起きちまった……

俺がビビり散らかしてたせいで

ルーク「……それでも、やっぱり怖いよ」

ジエイド「当然だと思いますよ。軍人なんてしていたら、そんな感情も薄れてきます」
ルーク「……」

ジエイド「安心なさい。バチカルに着くまで、ちゃんと護衛をします」
ルーク「……ありがとう、ジエイド」

礼を言う俺

それに対して眼鏡を上げ、特に返答することも無く微笑む

ジエイドと少しだけ間隔を空け、焚き火を見つめる俺

不意に肩を叩かれる

ガイ「きつかっただろ。突然外に放り出されたんだもんな」

ルーク「……ああ。街の外って、ホント危険なんだなって痛感したよ」

ガイ「魔物と盗賊は、倒せば報奨金が出ることもある。街の外での人斬りは私怨と立証されない限り、罪にはならないんだ」

・ ・ ・ 確かそうだったな

かと言って無闇矢鱈に人を斬っていい理由にはならないけど ・ ・ ・

善人が急に斬りかかってくるなんて考えてみれば中々無いよな・・・

ルーク「ガイも・・・今まで斬ってきたんだよな。魔物も・・・人も・・・」

ガイ「・・・まあな。自慢げに語れるような話じゃないが」

ルーク「でも、そうしなきゃ生きていけないんだよな」

ガイ「ああ・・・死にたくねえから戦うんだ。俺にはまだやることがあるからな」
ルーク「やること？」

ガイ「・・・復讐」

ルーク「え？」

ガイ「・・・なんて、な」

・・・焦った

ここで壮絶なカミングアウトするんかと！

ガイ「・・・そういやルーク」

ルーク「ん？」

ガイ「・・・よく頑張ったな」

ルーク「……なんだよ急に」

顔を外らす俺

ガイ「いや、なんて言うか……この数日で色々成長したなって思ってたよ」

ルーク「なんだそれ」

ガイ「なんつうか、大人びたって言うのかな」

ルーク「そうか？」

ガイ「ああ……。まあ今回みたいに良かった事だけじゃないとは思いますが、良い経験したんじゃないのか？」

まあそうだな……

チーグルの森の件、タルタロスの件……

濃厚も濃厚よ

少なくとも『俺』は色々成長したよ……

ガイ「……まだ色々不安だろうが、しっかり守ってやるから安心しろ」

ルーク「……へへっ。ありがとな、ガイ」
ガイ「！」

驚くガイ

え！驚くところあつたか？

ガイ「あのルークがお礼なんて……明日は嵐か？」
ルーク「……どんだけバカにしてんだ」

憂鬱な気持ちさが晴れていく

ミュウ「ご主人様……」

頭に乗るミュウ

ルーク「ぬお。ミュウ……びつくりするだろ」

ミュウ「ティアさんの様子はどうですか……？」

・ ・ ・ もちろん命に別状は無いのは知っているが
直ぐにでも顔を合わせたらいけど ・ ・ ・ 足取りが重い
俺のせいで ・ ・ ・ 怪我をさせちまったんだから ・ ・ ・

ミュウ「ご主人様 ・ ・ ・」

ルーク「わかつてるさ ・ ・ ・。悪いガイ、ティアの様子見てくる」
ガイ「 ・ ・ ・ ああ」

ティアの方に向かう

・ ・ ・ ううう

足取り重い ・ ・ ・

包帯をしているティア

・ ・ ・ 辛い

俺のせいで ・ ・ ・

ルーク「ティア ・ ・ ・」

ティア「どうしたの？」

ルーク「あ……その……」

……やべ

もう何話したらいいか分からなくなっちゃった

ティア「ありがとう……ルーク」

ルーク「……え？」

ティア「人と戦うのが怖いはずなのに、あなたは果敢に戦ってくれた」

ルーク「……」

ティア「だから……」

ルーク「違うんだ！」

ティアの言葉を遮る

ルーク「俺が礼を言われる筋合いなんてない……。俺のせいで、お前は斬られちまつたんだ……」

ティア「ルーク……」

ルーク「怖いよ、今も……。でもそれ以上に……」

ティア「？」

ルーク「ティアが殺されるかもしれないって思ったら……もつと怖くなったんだ……」

ティア「……え？」

ルーク「……俺も……全然良くわっかんねえけど、死なせたくねえって思ったんだ……」

だ……」

ティア「……」

ルーク「……」

沈黙が流れる

ルーク「……俺、守れるよう頑張るよ」

ティア「……ルーク？」

ルーク「ティアだけじゃない……色んな人を助けられるように頑張る……強くなるよ」

自分に言い聞かせるようにティアに語る

ルーク「だから・・・本当にごめん・・・ティア・・・」
ティア「・・・ばか」

10 何とかして回避するために

――

夢を見ていた

臆気だけど、自分が住んでいた世界の夢

俺がそこにいた

いつもと変わらず仕事をしていた

・・・あれ？

・・・誰だ？

俺の知らない人がいる

誰と話してるんだ？

・・・あれ・・・？

俺って・・・――

ティア「ルーク。起きて」
ルーク「・・・ん？」

あれ・・・俺・・・

ティア「そろそろ出発するわ」
ルーク「・・・」

頭がボーツとする

何か夢を見ていた気がする・・・
何の夢だっけ？

ティア「ルーク！」
ルーク「・・・はっ！」

うお!?

あれ？もう朝!?

てか、ティア!

ルーク「ティア、もう動いて大丈夫なのか?」

ティア「ええ。もう平気よ」

ルーク「・・・そうか」

そう言つて二人でジェイド達に近づく

ジェイド「私とガイとティアで三角に陣形を取ります。ルークはイオン様と一緒に中心にいて、もしもの時には身を守って下さい」

ルーク「え?それって・・・」

ガイ「お前は戦わなくても大丈夫なことだよ。さあ、いこうか」

戦わなくても・・・いい・・・

・・・

いや・・・それじゃダメだ

ジェイドなりの気遣いなのかもしれない・・・でも俺は・・・

ルーク「待ってくれ！」

みんなが俺を見る

ティア「どうしたの？」

ルーク「・・・俺も・・・戦う」

ジェイド「・・・人を殺すことを強要するつもりはありません。人には得手不得手があります」

ルーク「・・・それでも戦うよ」

俺自身、昨日から考えてた事だ

俺が戦わなければ、誰も守れない

手を汚してでも守りたいものがあるから

ティア「無理しない方がいいわ。あなたは優し過ぎる」

ルーク「・・・ありがとう。でももう決めたんだ」

そうだ・・・

もう後にも引けねえ

ルーク「戦わなきゃ守れないなら、俺も一緒に戦う！だから頼む！」

ミュウ「ご主人様、偉いですの！」

ルーク「もう躊躇わないよ。危害を加えてくるんなら、手段を選ばない」

そう言うと、ティアが俺に近づく

ティア「・・・人を殺すということは、相手の可能性を奪うことよ。それが身を守るためでも」

ガイ「・・・恨みを買うことだってある」

ティア「ルーク、あなたはそれを受け止めることができる？」

・・・可能性奪う

当たり前の明日を奪う行為

ティア「逃げ出さず、言い訳せず、自分の責任を見つめることができる?」

ルーク「ああ、背負うさ。言うだけは簡単かもしれないけど、しつかり背負う」

これから何十何百と盗賊や神託の盾の騎士団の兵士に会うはず

それでも背負っていかなければならない

それが、この世界で生きるということなのかもしれない

ティア達だってそうだ

好きで殺している訳じゃない

俺だって勿論そうだ

けれど俺も・・・もうこっちの世界の人間なんだ

だから背負わなきゃいけない罪なんだ

ルーク「みんなに迷惑もかけられない。足引つ張ってばかりじゃいられないからな」

ジェイド「良いでしょう。では、ルークも戦力として陣形を組み直しましょう」

ガイ「無理すんなよ、ルーク」

ルーク「ああ」

そうガイに言い、自分の手を見た

俺の手はもう血で汚れてしまっている

そしてこれから血みどろになっていくのかもしれない

それでも背負うさ・・・

綺麗事だけで突き通せるような世界じゃない

生きるために・・・守るために・・・

咎人になるんだ・・・

セントビナーに向かう道中色々考えていた

そう言えば俺がこっちの世界にいるなら、あっちの世界はどうなっちまってるんだろ

うかと・・・

ルークが俺になってるって事は・・・え？

まさか・・・ルークが向こうに行ってるのか無い!?

いやいやいやいやいやいやいや
いやいやいやいやいやいやいや

・ ・ ・ そうだとしたら ・ ・ ・ 絶対クビになつてゐる説 ・ ・ ・
いや、まだわからんな!

頼むから ・ ・ ・ 急に俺が元の世界に戻つた時にとんでもない事になつてゐるなよ?

ああああ ・ ・ ・ 怖い

つーか何で元の世界のこと心配してんだ

今は今の目の前の事考えねえと

ガイ「ティアは音律士(クルーナー)だよな。最近じゃ珍しいよな」

ジェイド「ええ。本来は後方支援が中心ですし、数もそう多くないでしょう」

あれ?

みんな何の話してゐるんだ?

く ・ ・ ・ クルーナーって何だっけ ・ ・ ・

予言士はスコアラールで ・ ・ ・ クルーナーは ・ ・ ・

イカン ・ ・ ・ オタク知識が働かん ・ ・ ・ ツ!

・ ・ ・ あ、譜歌歌う人の事か

イオン「ですが、僕は音律士が好きですよ。彼らの譜歌は心地いい」

ふむふむ・ ・ ・

ティア以外の譜歌って聞いてみたいな

イオン「それは・ ・ ・人を攻撃する譜歌もありますが、癒してくれる譜歌もある。特にティアの譜歌はとても懐かしい感じがします」

ティア「あ・ ・ ・ありがとうございます・ ・ ・」

照れるティア

あらく可愛いね

・ ・ ・ あー、駄目だ。これだから俺はいぎって時に動けんのだ

浮かれぼんちきになるな俺・ ・ ・ ツ！

ルーク「確かにティアの声ってすげえ綺麗だよな。聴き心地がいいって言うか」

ティア「や・・・やめて。褒めても何も出ないわよ？」

ルーク「いや、本当のことだし」

ティア「・・・」

照れて俯くティア

もしティアが元の俺の世界で歌手とかやったらすごい売れるんだろうなあ
その位綺麗な声なのなあ・・・

――城砦都市セントビナー

そこそこの会話をしながら着いたセントビナー

しかし目線に入るのは神託の盾騎士団達だった

完全に検問してる感じだ

ルーク「……タルタロスから近い街がセントビナーだからな。恐らくとは思っただ・・・」

ガイ「ああ。休息に立ち寄ると思ったんだろな」

ジェイド「おや、二人ともキムラスカ人の割にマルクトに土地勘があるようですね」

あ、やべ

ガイはともかく俺が知ってるのはおかしいな・・・

ガイ「まあな。卓上旅行が趣味なんだ」

ルーク「……俺は……その……感だ！」

ジェイド「これはこれは、そうでしたか」

ティア「大佐、あれを……」

そうティアが言う

あれは……馬車か

「エンゲープの者です。ご注文いただいた食材をお届けにあがりました」
「ご苦労」

「後からもう一台まいります」

そう言うのと馬車は中へ入っていった

ルーク「警備の割にザルだな。荷物までは確認しないんだな」

ジエイド「ええ、これは使えますね」

ガイ「もう一台を待ち伏せて乗せて貰うんだな」

イオン「エンゲープへの街道を少しさかのぼってみましょう」

ティア「そうですね。行きましょう」

俺たち一行は街道を少し戻る

少しすると馬車がこちらへ向かってくるのが見えた

ルーク「その馬車、待ってくれ！」

馬車へ手を振りながら静止を促す

案内素直に止まってくれる馬車

このまま通り過ぎられたら死ぬ程シヨックやけどな

ローズ「カーティス大佐じゃないですか！それに確か……ルークだったかい、旅の人」

そっか！

ここでもう一回ローズ夫人に会えるんだったな！

ルーク「ローズさん、悪いのは承知だけど馬車に匿ってくれないか？」

ガイ「セントビナーへ入りたいのですが、導師イオンを狙う不逞の輩が街の入り口を見張っているのです」

おお……流石ガイ……

簡潔に乗せて欲しい理由を端的に纏めた……

ガイ「ご協力いただけませんか」

ローズ「おやおや。こんなことが起きるとは生誕祭の預言にも詠まれなかったけどねえ」

ティア「お願いします」

ローズ「いいさ、泥棒騒ぎで迷惑かけたからね。お乗りよ」
ジェイド「助かります」

トントン拍子でことが進む

ローズの厚意で一行は荷台に隠れる

ルーク「なあジェイド」

ジェイド「はい？」

ジェイドに話しかける

「ここから少しずつ変えていきたい

ルーク「多分……ここに六神将が来ると思う」

ジェイド「確かに、来ないとは限らないと思いますが……」

ルーク「・・・五人だ」

ジェイド「？」

ルーク「五人ここに来る・・・と思う」

ジェイド「・・・そう思う根拠は？」

ルーク「・・・感だ」

ジェイド「・・・」

・・・本当にそうとしか言えない

ただこれには訳がある

ジェイドに少しづつ知らせていこうと思った

でかい改変が無い限り、ストーリー上に沿ってことが進むに決まってる

だからこそ、多少不自然でもジェイドに知らせて行く

先の未来の為に・・・

ジェイド「具体性に欠けますね・・・。何にせよ、警戒は怠りませんが」

ルーク「今言ったこと・・・一応覚えていてくれ」

ジェイド「分かりました」

殆ど半信半疑のジエイド

まあそりやそうだよな

一つずつでいい

少しでも信じてもらわねえと

荷台に乗りながら会話をした

少し経ってから馬車が止まった

ローズ「エンゲープの者です。先に馬車が着いていると思えますが……」

「話は聞いている。入れ」

ローズ「ありがとうございます」

難なくエンゲープに入ることに成功した

大広間辺りで周りを警戒しつつ、俺たちは荷台から降りた

ローズ「じゃあ、あたしたちはここで」

ルーク「本当に助かったよ。ありがとう」

イオン「お世話になりました」

ローズ「気にしないでくださいよ。それよりお気をつけて」

そう言うとローズはその場を後にした

ルーク「ザル警備で助かったな。ローズさんにも感謝だけど、あれ検問って言えるんかな」

ジェイド「ええ。あれらが私の部下でなくて良かったですよ」

ガイ「はははは。。。すごい毒舌だな。。。」

実際ホントソレよ。。。

俺が上司だったら怒る案件や。。

ルーク「まあそれはさておき、アニスはここにいるんだよな」

ジェイド「マルクト軍の基地で落ち合う予定です。。。生きていればね」

ルーク「。。。やめーや嫌なこと言うの。じゃあ行こうか」

ティア「神託の盾に見つからないよう警戒を怠らないようにね」

ルーク「わかってるさ。心配しすぎたよ」

ガイ「なんだ？随分と仲睦まじいじゃないかルーク。ナタリア姫が妬くぞ」
ルーク「・・・」

ジエイドもそうだが、なんでこう反応に困る事言うのかしらねホント
そう思っていたらティアが動いていた

ガイ「・・・うわっ!!」

ガイの腕にくつつくティア

ティア「くだらないことを言うのはやめて」

・・・羨ましい

それ、後で俺にもやってよティア

ガイ「わ、わかったから俺に触るなあっ！」

そうガイが吠えると、ティアが離れた
ガイは地面にへタレ込んでいる

イオン「この旅でガイの女性恐怖症も克服できるかもしれないね」
ルーク「お・・・おう、そうだな」

うーん・・・ガイよ、強く生きろ

ガイの内情というか過去を知ってるだけに止めたい所だが、今回はティアに感謝だな

――マルクト軍基地

ジェイド「マルクト帝国軍第三師団所属ジェイド・カーティス大佐です。グレン・マ

クガヴァン將軍にお取次ぎ願えますか？」

マルクト軍兵士「ご苦勞様です。マクガヴァン將軍は来客中ですので、中でお待ち下さい」

そう言うと中へ案内された

中に入ると会話が聞こえてきた

グレン・マクガヴァン「ですから、父上。神託の盾騎士団は建前上預言士なのです。彼らの行動を制限するには、皇帝陛下の勅命が――」

老マクガヴァン「黙らんか！ 奴らの介入によつてホド戦争がどれほど悲惨な戦争になったかおまえも知つとろうが！」

ジェイド「お取り込み中、失礼します」

ジェイドが割つて入る

グレン・マクガヴァン「死霊使いジェイド……」

老マクガヴァン「おお！ ジェイド坊やか！」

ジエイド「ご無沙汰しています。マクガヴァン元帥」

老マクガヴァン「わしはもう退役したんじや。そんな風に呼んでくれるな。おまえさんこそ、そろそろ昇進を受け入れたらどうかね」

流石ジエイド・・・

本当に有能なんだな・・・

老マクガヴァン「本当ならその若さで大将にまでなっているだろうに」

ジエイド「どうでしょう。大佐で十分身に余ると思つていますが」

ルーク「やっぱジエイドって偉いんだな」

ガイ「そうみたいだな」

老マクガヴァン「そうだ。おまえさんは陛下の幼なじみだったな。陛下に頼んで神託の盾騎士団を何とかしてくれんか」

ジエイド「彼らの狙いは私たちです。私たちが街を離れば彼らも立ち去るでしょう」
う」

老マクガヴァン「どういうことじや？」

ジエイド「陛下の勅命ですので、詳しいことはお話できないのですよ。すみません」

そう会話をしていると咳払いをする將軍

グレン・マクガヴァン「カーティス大佐。御用向きは？」

ジェイド「ああ、失礼。神託の盾の導師守護役から手紙が届いていませんか？」

グレン・マクガヴァン「あれですか。・・・失礼ながら、念のため開封して中を確認させてもらいましたよ」

ジェイド「結構ですよ。見られて困ることは書いてないはずですから」

そう会話を交わすと、手紙を受け取った

受け取った手紙を一通り目を通すジェイド

そうしていると俺に差し出した

ジェイド「どうやら半分はあなた宛てのようです。どうぞ」

ルーク「え、俺かい。ラブレターでも書いてあるんか？」

アニス『親愛なるジェイド大佐へ♡

すっごく怖い思いをしたけど何とかたどり着きました☆

例の大事なものちゃんと持っていていきます。誉めて誉めて♪

もうすぐ神託の盾がセントビナーを封鎖するそうなので先に第二地点へ向いますね

♡

アニスの大好きな (恥ずかし☆ 告っちゃったよう♡) ルーク様♡

はご無事ですか？

すごーく心配してます。早くルーク様♡ に逢いたいです☆

ついでにイオン様のこともよろしく。それではまた☆

アニスより』

ルーク「胸焼けしてきたな・・・」

ガイ「おいおいルークさんよ。モテモテじゃねえか。でも程々にしとけよ。おまえにはナタリア姫っていう婚約者がいるんだからな」

ティア「・・・」

ルーク「・・・いや、あのくアニスについてはちよつと違うような・・・」

ティア「それより、第二地点というのは？」

ティアが割って入る

ジェイド「カイツールのことです。ここから南西にある街でフーブラス川を渡った先にあります」

ガイ「カイツールまで行けばヴァン謡将と合流できるな」

ティア「兄さんが……」

ガイがティアに向き合う

ガイ「おつと。何があつたか知らないが、ヴァン謡将とは兄妹なんだから。バチカルの時みたいにいきなり斬り合うのは勘弁してくれよ」

ティア「……わかつてるわ」

ルーク「……」

……なんだろうな

気の利いたセリフが全然思いつかねえや

励まそうにも……なあ……

ジエイド「では、私たちはこれで失礼します」

老マクガヴァン「神託の盾に追われてるなら、わしが力を貸すぞ。わしはこの代表市民に選出されたんじゃ。いつでも頼ってくれ」

ジエイド「ありがとうございます。元帥」

やはりこういう時に顔が広いのって強いな・・・

基地を後にする俺たち一行

広間から門に近づいた時だった

ティア「・・・隠れて！神託の盾だわ」

ルーク「やばいやばい、隠れるぞ！」

遠目に見ると、六神将が居た

あれは・・・リグレットにラルゴ、アリエツタにシンクだな

リグレット「導師イオンは見つかったか？」

「セントビナーには訪れていないようです」

シンク「導師守護役がうろついていたってのはどうなったのさ」

「マルクト軍と接触していたようです。もつともマルクトの奴らめ、機密事項と称して情報開示に消極的でした」

ラルゴ「俺がああ死霊使いに遅れをとらなければ、アニスを取り逃がすこともなかった・・・面目ない」

デイスト「ハーツハツハツハ！だーかーらー言つたのです！」

奥から椅子に座る男が現れる

デイスト「あの性悪ジェイドを倒せるのはこの華麗なる神の使者・・・神託の盾六神将薔薇のデイスト様だけだど！」

シンク「薔薇じゃなくて死神でしょ」

デイスト「この美しい私がどうして薔薇でなく死神なんですかつ！」
リグレット「過ぎたことを言っても始まらない。どうするシンク？」

デイストそつちのけで会話が進む

デイスト「・・・おい」

シンク「エンゲーブとセントビナーの兵は撤退させるよ」

ラルゴ「しかし！」

シンク「アンタはまだ怪我が癒えていない。死霊使いに殺されかけたんだ。しばらく大人しくしてたら？それに奴らはカイツールから国境を越えるしかないんだ。このまま駐留してマルクト軍を刺激すると、外交問題に発展する」

デイスト「おい、無視するな！」

リグレット「カイツールでどう待ち受けるか・・・ね。一度タルタロスに戻って検討しましょう」

ラルゴ「伝令だ！第一師団！撤退！」

「了解！」

そう言うのと兵士達が続々と撤退し始める

アリエッタ「・・・アリエッタ、考えある」

リグレット「なんだ？」

アリエッタ「アリエッタ・・・一人で動く」

シンク「随分積極的じゃないか。まあいいさ、ハマしないようにしな」

そう言うとシンクは歩き始める

リグレット「何か考えがあるのか？」

アリエッタ「……うん」

シンクに続き、三人も歩き始める

デイスト「きいいいっ！私が美と英知に優れているから嫉妬してるんですねーっ
!!」

そう叫ぶと椅子が飛び上がって行った

ジエイド「……」

ガイ「あれが六神将……。初めて見た」

ルーク「ああ。『五人』だったな」

ガイ「そうだな。黒獅子ラルゴに死神デイスト、烈風のシンク、幼獣のアリエッタ、魔弾のリグレット……。いなかったのは鮮血のアツシュだな」

ティア「六神将が動いているなら、戦争を起こそうとしているのはヴァンだわ……。イオン「六神将は大詠師派です。モースがヴァンに命じているのでしよう」

ティア「大詠師閣下がそのようなことをなさるはずがありません！極秘任務のため、詳しいことを話す訳にはいきませんが、あの方は平和のための任務を私にお任せ下さいました！」

……。みんな機密だの極秘だの情報開示しないなホント

そんなんだから拗れるのでは？

ルーク「ヴァン師匠だのモースだのどうだっていい。今は六神将の監視をかくぐつて戦争を止めねえと」

ガイ「その通りだな。ここで問答をしてもしょうがない」

ティア「……。そうね。ごめんなさい」

ジエイド「・・・さて、一先ずカイツールへ向かいましょう」

そうジエイドが言うと、皆が歩み始めた
少し遅れて俺も歩く

ジエイド「・・・ルーク」

ルーク「・・・ああ」

正直ジエイドに呼び止められるのを期待していた
忘れられてたら嫌だなんて思って、あえて五人を強調したけど

ジエイド「何故分かったのですか？」

ルーク「・・・」

ジエイド「タルタロスであなたが対峙した六神将は、リグレットとアリエツタ、そしてラルゴでした」

ルーク「・・・ああ」

ジエイド「ですがあなたは、ここに五人来ると言いましたね」

ルーク「・・・ああ」

ジェイド「何故・・・分かったのですか？」

ルーク「・・・今は、『感』としか言えねえんだ」

ジェイド「あなたの言葉にはいつも具体性に欠けます。信じようにもー」
ルーク「分かっているんだ！」

強い口調で言う

ルーク「俺にも説明出来ねえんだ・・・でも、何が起こるか分かる・・・気がするんだ」

ジェイド「それは、預言か何かの？」

ルーク「・・・いや、関係ないんだ。ただ・・・」

ジェイドに全てを言うべきだが・・・

結局説明出来ない・・・

もどかしい・・・

ルーク「説明も何も出来ないけど・・・信じて欲しいんだ」

ジェイド「・・・全くあなたは。それで私が納得するとしても？」

ルーク「・・・ごめん」

ジェイド「・・・」

ルーク「ただこれだけは確信して言えるんだ」

ジェイド「と言うと？」

ルーク「このままだと、必ず戦争が起こる」

ジェイド「！」

ルーク「それだけじゃ無い。ジェイドが考える以上に死人が出る」

確かな確信を持ってジェイドに伝える

ジェイド「あなたは一体、どこまで知っているのですか？」

ルーク「・・・全てだ」

ジェイドの表情が強ばる

ジェイド「……タルタロスの襲撃、まさかあなたは知っていたのですか？」
ルーク「……」

ジェイドが槍を構え、俺に向ける

ジェイド「……答えなさい」

ルーク「……ああ、知っていた」

ジェイド「！」

ルーク「……外れてて欲しいとも思っていた。でも結局駄目だった」

ジェイド「なぜ今更話したのです！」

ルーク「……心のどこかで、楽観していたんだ」

ジェイド「楽観？」

ルーク「俺の知っている通りにことが進めば、それならそれでも良いって思っていた
自分がいたんだと思う」

ジェイド「沢山の人間が死んでも、ですか？」

ルーク「少なくとも、今は違う。タルタロスの一件……本当だったら防げた惨事だっ
た筈なんだ」

語り続ける

ルーク「俺が何かことを進めない、俺の知っている通りにことが進んじまう。でも俺一人じゃどうにもできないって分かってきたんだ」

槍を掴み、更に語る

ルーク「見殺しにした俺を恨むなら、今ここで俺を斬り捨ててくれ。あれは、言い替えば俺がみんなを殺したも同然だ」

ジェイド「……」

静かに俺を見定めるジェイド

ジェイド「……全てあなたのせいだとは思いません。ですが――」

言葉を濁すジェイド

ルーク「……」

ジェイド「いえ、起きてしまったことをあれやこれやと言及していくのはやめましょう。生産性に欠けます」

ジェイドが槍を仕舞う

ジェイド「……では、今後のあなたの方針を聴きたいですね」

ルーク「……まず一つ目に、俺の知っていることとは違うことが一つだけある」

ジェイド「それは？」

ルーク「ライガ・クイーンだ」

ジェイド「あのチーグルの森の」

ルーク「ああ。俺が知っている筋書きだと、ライガ・クイーンは死んでいる」

ジェイド「……ほう」

ルーク「でも、今は違う。クイーンが生きているという状態でここまで来た……。でも、全く筋書きは変わらない」

腕を組みながら語る

ルーク「これがどう影響するかは俺自身分からない。でも今の所何も変わらない」
ジェイド「だとしたら、今後の動きをある程度予測できると？」

ルーク「ああ、大まかにだがな」

ジェイド「・・・にわかには信じがたい、と言いたいところですが」

ルーク「・・・」

ジェイド「・・・わかりました。ですが全て信用するという訳にはいきません」

ルーク「ああ。選択肢の一つとして聞いてくれればいい。それとーーー」

一度周りを見渡してジェイドに向き直る

ルーク「このことは、今は俺とジェイドだけの秘密にしてくれないか？」

ジェイド「何故です？」

ルーク「みんなを混乱させたくない。それにジェイドなら、俺が話した事を汲んだ上で対策してくれるだろうしな」

そう言うのと、眼鏡をかけ直すジエイド

ジエイド「やれやれ、私も買われたものですね」

ルーク「・・・悪いな」

ジエイド「・・・」

俺の腹の中をジエイドに話した

これがどう転ぶか・・・

少なくとも悪化することはないとは思う

ジエイドは一応は納得してくれたが、まだ半信半疑だろうな
いや、当たり前だ

逆に疑って来なかったらそれはそれで怖いしな

・・・ジエイドは、恐らく俺の事を恨んでいるだろうな

タルタロスのこととは・・・完全に俺の・・・

・・・過ぎたことを、とジエイドは言っていたが、俺は多分今後もずっと引きずると
思う

だからこそ、もう二度とあんなことを起こしたくないから

だから俺は、ジエイドに伝えた
とは言え、全てという訳じゃないが・・・

ジエイド「・・・となると、ルーク。次に六神将が現れるのは？」
ルーク「ああ」

恐らくここから何か変わるかもしれない

何となく思う

何せ次に会うのは・・・

ルーク「フーブラス川で、アリエツタと対峙すると思う」